明治三十年五月十日發行

女鑑

第百三拾二號

東京國光社

女鑑第百三十二號

目録

清少納言



女子教育の結果

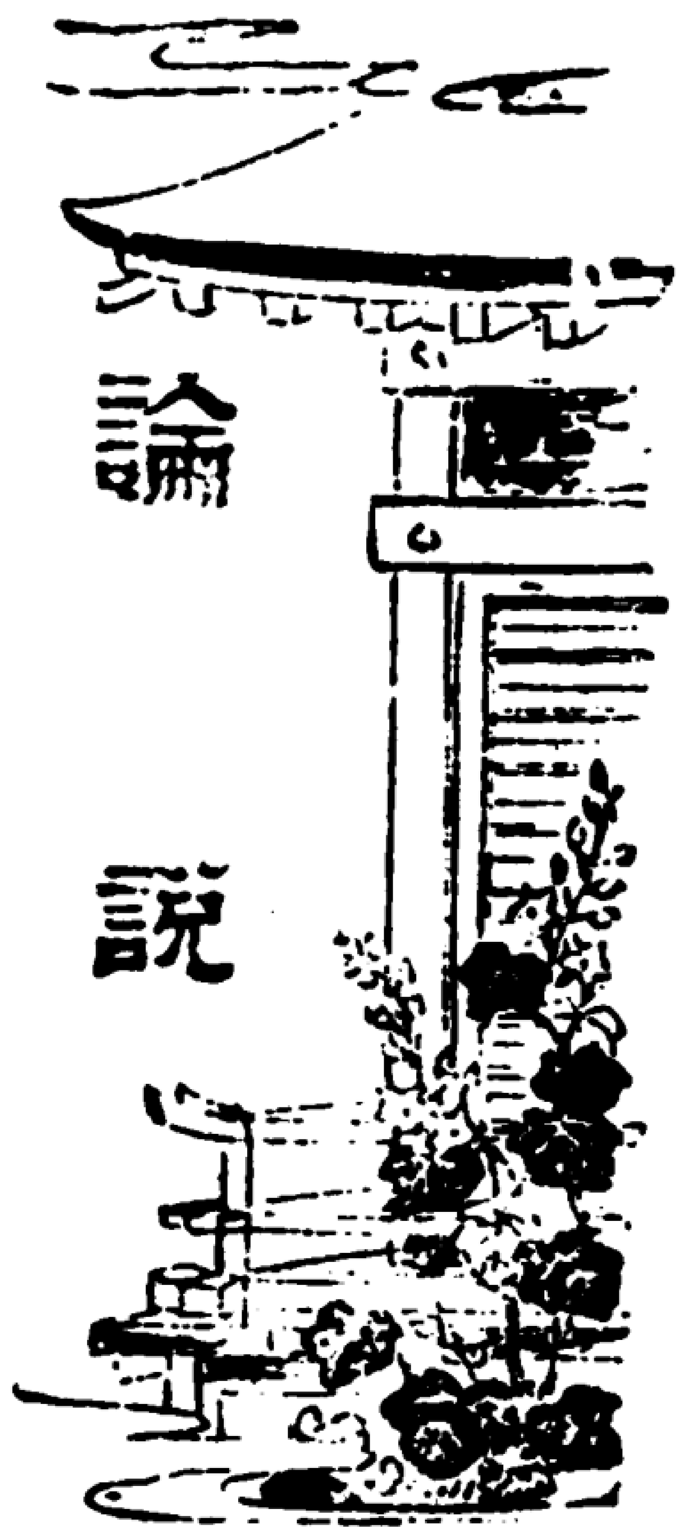
近時、女子の教育は、やゝ盛になりゆきて、各地に、高等女學校等の設けも、漸く、その數を増し、今や女子大學校の設立さへ計るものあるに至る。然して、吾人は、その教育隆盛の美果として、實際に、良妻たり、將た賢母たる女子を得たりやと顧みれば、轉た慨歎に堪へざるものあり。試に思へ、吾人が常に途上に於て、相接し相見る所の女子を、その容姿、やさしくして淑女の風あり、しとやかにして温雅の趣きあるものは、多く學校教育を受けたること少き女子にして、而して、いかにも生意氣に、われこそはと云はぬばかりのかほつきし、わざと、髮を束髮に結び、要もなき眼鏡などかけて、見るだも忌はしきかたちしたるは、多く中等以上の教育をうけたる女子なること、吾人は、實見上に於て、之を斷言するに憚らず。こゝを以て、妻を娶るものも、なまじひよ教育をうけたる女子より、

寧ろ、慈愛なる母の手一つに、樂しき家庭に育てあげられたる女子を望むは、被ふべからさる事實なり。斯の如くにして、又、教育ある女子は、自ら謙らず、われは中等以上の教育をうけたる女子なり、などて賤しきものと婚を結ばんやなど思ひたかぶりて、父母の命をさへこばみたらん結果は、多く、生涯、その身のよるべなく、甲斐なき浮世の不幸をかこつ餘り、獨立とか、自由結婚とか、果ては男女同權など、女子ににげなき事をまで言ひ出で、いよ／＼、世に要なきものとはなれ。あな、教育は、何の爲にかうけたる。その身をたて、その家を治めんとて學びたるものは、かへりて、身のあだとなりをはらんこと、誠になげかはしき限りならずや。

抑、斯の如くなるものは、教育の方策、未だ、その宜しきを得ざるにも因らん、そは、後日再び言ふこともあるべし。こゝには、教育を受くる孃たちの心得につきてものさんに。吾人が常に女子教育に就きて切望する所は、教授と實際とをして、密接なる關係をもたしめ、日常、女子が、言ふ處、行ふ處のものは、則、學校に於

て、習ふ處、さづかる處のものならしめんことなり。されば、孃たちも、此の心を以て、學び得たることを、日々實踐し行かば、幾何は、教育の本旨に適ひ、教化の美德を具へたる、信の美女ともなりなんか。徒らに、歷史を知り、地理を諳んじ、文を書き、歌を詠みたりとて、こを實際に應用せざれば、將た何にかはせん。さるを、もの知りたりとて、そをてがら顏に、ほこらはしきは、かたはらいたきことどもなり。なべて、物知りといふきはは、知りたることも知らず顏に、要なくては、面にも口にも出さゞるにて、れくゆかしくも、尊くも見ゆるなれ。斯くありてこそ、うけたる教育も、始めて、その德光を輝し、世に慕はるゝものともなりなん。くれぐれも孃たち、受けたるをしへをあたら身のあだになしそ。

しるべすき
しこのちのしり
なかくに
よこさのみちに
人まどはする



所感を書して諸嬢に問ふ

坂本三七郎

喬木森然屋を出で、亞壁樹陰に隱見し、犬門を守りて鷄聲相聞ゆるものは、吾人其の富家豪戸たるを知る。黑漆の車常に門に横はり、屋室雅にして門庭淸きものは、吾人貴紳の居なるを知る。古人も、富は屋を潤し、德は身を潤すと云ひしは、是れ自然に榮華外に發し、自から知らずして而して然るものなり。然れども、富豪の家なり。貴紳の居宅なり。人の之を見て知る所以のものは、其の屋の大なるが爲なり。其の庭の淸きが爲なり。然るに吾人が常に感ずる所のものは、世人の撰と異にして、富貴利達の外に於て、慕ふべく敬すべく、富以て購ふ能はず、貴位以て取ること能はず、天樂人和、人をして藹々の氣に薫せしめ感に入るの深きものなり、是また何ぞや。

吾人は、常に知己友人を訪ひ、新知に交を結び、舊故と情を温む、出入往來するも亦多し。而して其の訪ふ所の家紳縉の家にあらず。富豪の宅にあらずと雖ども、門に入

りて之を察すれば、稚兒嬉々として遊び、一家相和して和樂の氣其の屋に滿つるを想ふ。而して是等藹然たる和氣は、其の主に接して始めて知るにあらず。其の妻女と話して察するにあらず。唯、俗に所謂何となく和氣の其の家を擁護して、不祥の氣を去らしむるの思あり。是富豪貴紳の家に於ては稀にして、却て貧ならず。富貴ならざるの家に多し。就中、吾人は、貧賤の家に往きて、此の藹然たる和氣を觀察すれば、更に其の一家の良風を欣慕して已まざるなり。何となれば、富貴の家、衣給して食足り、一家和樂のこと之を行ふに易く。貧賤の家、常に苦雨愁風多きは、世上の常態なり。然るに、祥風吹て憂色を解き、子女笑て父母樂み、一家藹雲の中に相和するは、尤も難きこと、是を爲すの基は、果して何れの邊に在るかは吾人が常に之を探究せし所なりき。

一家を保つのこと固より賢夫を要すと雖も、吾人が觀察する所にすれば、和樂の一家は、寧ろ賢夫の力少くして、賢妻良母の功多きに居る。吾人が前段述ふる所を以て之を徵するに、初に之を訪て後其の妻女に會す、其の人必らず賢婦良妻なり。言語の恭敬、容姿の温雅、一家外觀の和氣と相似たるの婦女子多きを見る。家中の和氣發して、初來の人をして其の家庭の情を想知せしむ。一家主婦の德、豈一家を支配左右す

る力あるにあらずや。女德既に全し、父母を奉して孝、夫に事へて貞節、子女を敎ゆるに慈。一本萬技、一源千流、葉繁くして、水清し。汲て神に饗すべく、折て天使に捧ぐべし。女德一家を和す、吾人は常に此等の婦女子を推尊して、日本女子と呼ぶ。吾人は、曾て詩經なる書を讀み、國風の一章を誦し、文王の妃の德を頌するを見て、其の過大にあらざるかを疑へり、今にして女性の德之を養ふの効至大なるを探知せり。吾人は常に童男童女を敎育す。其の來りて敎を受くる男女を觀るに、容姿温雅にして、起居節あるものは、其の母必らず普通の女子にあらず。吾人は之を平常に試み、愈々家庭敎育の大なるを知り、家庭敎育は父に非ずして多く母の感化の力によることを知れり。而して其の感化敎育は、富の爲に然るを得す、貴か爲に然るを得す、垢衣の稚女、麗粧の富女と幷び、吾人をして繿褸中の珠玉を愛せしめ、紈袴の男子、却て褞袍の男兒に先鞭を輸す。吾人は之を以て一に一家の天女神人なる主婦の德性感化に歸せんとす。女鑑讀者の諸孃德を養ひ學を修め、子女を敎化感養して、以て國家の益を爲さしめた、諸孃が國家に報ゆるの功大なり。豈に男子と辨論を爭ひ、學を競ひ、而して後に國家に盡すと云はんや。近頃、吾人親しく接する所あり、感に堪へず、書して讀者諸孃が一顧を乞はんとす。

女子教育一斑（四十）

三輪田眞佐子

其五　女子の美育

易に曰く、大哉乾元萬物資始、乃統天雲行雨施、品物流形。と、實に天地は無邊にして、無量の現象を蓄ふるものなり。すなはち、上には日月星辰ありて文をなし。下には、山川草木ありて章をなす。其の間、おのづから人をして恍惚と歎はしめ、怡々と樂ましむる妙趣あり。この天然の徳を美と名づくべし。

人はかゝる美境に生存するものなれど、從ひて、天性、既に美を感識せしむる力を有するものなり。思ふに、教育は、天地の陶育を利用して、完全なる人物を作るべきものなり。つとめて、この至靈至善なる天然の美徳と同体となるやう、人を教育することそ肝要なれ。これを美育となん言ふなれ。

されど、人は、男女を論せず一般美育を施すべきものなれど、わきて女子は、その天賦、および、天職を全うするには、是非とも美育なかるべからず。されど、美は天然に存するものを、人これを感受して、その徳澤に潤浴すべきものなれど、外よりこれを教授するは容易きわざにあらじ。今試に、美の美たる所以を述ぶると共に、感化の方法をものせん。

第一天地の秘義を悟るべし

凡そ天地間に充塞する天然の光景は、美の秘義を含まざるものなし。されど、この美なる光景に及ぶ限り接すべし。これに接すること屢々なれば、自然その秘義を悟るに至るべし。見よ山の端にかゝる眞如の月、梢に渡る春霞は更なり。幽邃なる溪間の鶯聲、あるは枯木に不時の花なす雪の景色など、四季のながめは一として美の本原ならざるはなし。故に、これらの美に接すること多きものは、覺えず高尚なる美の理想を得るならん。

されど、女子は一家に閉居するを常とすべければ、雲水を追ひて天然の美境に逍遙せんこと難し、これを補ふには、文學を以てすべし。元來、文學は、天地の秘義を表はすものなれど、文學の趣味を知るときは、幾分なりとも美の思想を養ふに足るべし。契仲阿闍梨は(春はもえ秋はもみぢて神代よりをりにつけたる大和ことの葉)と歌ひけり。されど、女子は、和歌の道をたどるだに、坐ながら天然の光景に接するを得ん。こをもて、おのれは、彼の國の女學校に、作歌の科あるを聞かざれど、我が國の女學校には、是非とも作歌の科を設くべしと思ふなり。こは實用の効はなからんも、一には美育のため、二には特有の國風を保つため、三には歴史上女子の讀むべきもの、四には中等社會以上の交際に必用なればなり。然るに、世の現狀を見るに、正則の教育

を受けしものは、この道に暗く、反りて變則の教育受けしもの、歌を讀むため、世にもてはやさるめり。諺に、佛像を刻みて眼を入れざるとは、かゝる謂にや。誠に遺憾の至りにこそ。

第二和合の思想を養ふべし　總て宇宙の事物が形態を存して實在する所以のものは、和合の德によるならん。思ふに、時と所とを離れて、天地なく萬物なし。如何となれば、時の所に於ける關係相同じきか、將た前後なるかに從ひて、物質象をなし。神靈は氣をなす。而してこの關係能く和合すれば、始めて美をなすものなり。

和合の美を養ふ道多しといへども、音樂こそ最もよきものなれ、そもそも音樂は、天然に調和する震動なるを以て、深くこれに感ずれば、靄然たる和氣を養ふに足るべし。孔夫子の、禮に立ち樂に成るとのたまひしは、由來あることなり。さればにや、むかしは、いづれの國も、音樂を以て德育の道となしけり。蓋、今日とて、美を廣き意味に解釋すれば、德を含むならん。たとへば、道德上の善行は、必ず感情に訴へて、美事と認むのみならず、德もて事理の秩序を正せば、則れのづから美觀をなす如く、德あらば必ず美これに伴へばなり。

されば、音樂の源は、多く神を祭るため奏せしに起りけんとかや。その樂器も、恐ら

くも皆々たる鶯聲涓々たる水音に擬せしならん。しかるに、後世に至りては、樂器の種類も多く、且人工を加ふること巧になりぬれど、その技術は、著るく進歩せしとはいへ、天然には遠ざかる傾きあり。況して、和するに俗謡を以てする今日に及びて、最早音樂は風俗を良化する道と言ひ難きが如し。故に教育上の音樂は、高雅なるものを撰び卑野なるを避くべし。

近來、いづれの女學校も、音樂の科なきものはあらじとはおもふも、果してこが、徳育、あるは美育をなす効力ありやなきかは知るべからず。如何となれば、教ふるものこれを單に技術となし、從ひて學生は、一時の耳を歡すに過ぎざるものと知り、遂にはそがため輕浮の風に化して、淑徳を破る例もありと聞けばなり。こは必竟音樂の罪にあらで、全く教ふるもの君子ならざればなり。但樂器を扱ふは、技術ならんも、これを教育に應用する以上は、和合の美を養はんことを目的とせざるべからず。

もし、眞正なる音樂の德を人事に施さんか、家庭は團欒に、交際は圓滿になるべきは勿論、動止も、装飾も、各宜しきに適ひ、以て和合の美を見るべきなり。されど、かゝる効は、音樂家に至誠の德ありてこそ。かの技術のみを傳ふる俗者輩、なぞか人を感化するに足らん。あはれ。



史談

淸少納言

鹽井ふく子

水もあまりに淸くては魚すます、人もあまりに心潔よきはくみするもの少しと云ふ世の習ひ。げに淸少納言よ、あまりにその淸原の淸き心のまゝを、はゞからずふるまひ云ひたれど、或は口やかまし、したり貌なり、才かしこがりし、女子の德を備へざりしなど、あながちにれどしめ云ふものあれど、それは少しは才かしこだちしきはもあらんが、さのみ、れどすは、あまりにひがめなる評にて、たゞそしり言とのみ聞えぬ。今そのしるせし日記、即ち枕の草紙をよみ、その常の行ひと、人となりとを考ふるに、情もいと深く、めでたき事、ありがたき事、あさましき事、憎くき事、げによく道に叶ひて、後の世のいましめともなるべく、はた親に孝なりし事、君に忠實なりし事々、思ひくむまゝにいとあはれにめでたきふし多くぞ覺ゆる。

淸少納言は、天武天皇の御子、やがて日本紀を撰はれし舍人親王より十代の孫にて、淸

原元輔卿が女、深養父ぬしの曾孫なり。清少納言と稱へられしも、もと、その姓を用ゐたるにて、一條天皇の皇后定子の君につかへまつりて、やんごとなくとりなされける女房にはありけり。

少納言とは、もと太政官の判官にて、つねに主上の御傍に侍りて、官印をかんがみつかさどりける男子の官名なるを、此所に女子にして、少納言と云へるは、そも如何なればにや、當時は　皇后の宮の御方にもさる同じ官のありしにや。或は此のおもとのなせし事、少納言の官にあたりたれば、さ、呼びし事の、いつか誠の官の如くになりしにや。さる事はとまれかくまれ、此の少納言の天才慧智、萬人にぬきんでたる事は、今更にこと新らしう云ふまでにもあらねど、枕にこそはしはべらめとて、たゞかりそめに記せし言の葉のさばかりかしこく、今も國文學のしをりとなりて、世に二つなき至寶と貴ばれぬることそめでたしともめでたし。

けに春はあけぼの、ほの／＼とそめ出せし匂ひなど、誠に花の如く、月の如く、うるはしきかど／＼より始めて、金石のおのづからに聲ある如き、その忽然として、筆をなげとめたるは、糸竹の絃の切れて一聲高く聲をはなちたるにも似て、いとめでたし。如何なる天籟、地籟もかくはと思ふばかりにこそは聞ゆれ。

父元輔卿は、村上天皇の朝に、勅を奉じ、禁中の梨壺に於て、大中臣能宣、源順、紀時文、坂上望城の四人と共に、後撰和歌集を撰まれし君にて、人にも知られたる歌よみなりけれど、少納言その人の女故に、はづかしき歌などなまじいによみては、親々の名をもけがさんなどとて、あまりに歌はよまざりけり。されど清少納言の歌はいと少く僅に數十首に過ぎざりけり。

「ものゝ折りなど人のよみ侍るにも、よめなど仰せらるれど、ゑ侍ふまじき心地し侍る。如何でかは、文字の數しらず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅の折りは菊などをよむ事は侍らん。されど歌よむと云はれ侍りしすゑ〴〵は、すこし人にまさりて、其の折りの歌はこれこそありけれ、さは云へど、それなれどなど、いはれたらんこそ甲斐ある心地し侍らめ。つゆとりわきたる方もなくて、流石に歌がましく、我はとれもへるさまに最初によみ出で侍らんなん。亡き人のためいとほしく侍るなど、まめやかに啓すれど、笑はれ玉ひて、さらど、たゞ心にまかす、我はよめとも云はじとの給はすれど、いと心安くなり侍りぬ」

之は皇后の宮に啓せし言葉にて、皇后のよめとの玉ふによまぬも心つらく、さらぞとていみじからぬ歌よみて、したりがほにさし出さんは、なき人、乃ち元輔、深養父な

どのためにも口惜しと啓せし心もをかしきに、その後、后の宮の兄君伊周の大臣などれはして、歌合せさせ玉ひける折りも、固くよまざりけるに、などよまずや、題とれと大臣もの玉ひ、皇后も今宵はよめなどせめ玉ふも、清少納言は先日のゆるしを以て、一向によまんともせざりけるを、后宮自ら御歌をたまはりてすゝめられけるやう。

もとすけが後と云はるゝきみしもやこよひの歌にはづれてはをる

とありけるを、清少納言返し奉るやう

その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよままし

つゝむ事侍らずば、千歌なりとも是よりぞ出まましと啓しつ」

などの心がけは、もと心の勝ちたる故とは云へ、またその祖先の名をおとすまじと思ひたる孝心。あまりありとは汲まれけり。されど孝ある人の子をあはれなるものゝ第一に書き。または舅にはめらるゝひこ、また姑に思はるゝよめのきみなどを、ありがたきものゝ最はじめにれきたるなどは、誠に目出度孝心のありたればにこそ。

親に孝なるものは、君にも忠とて、清少納言は深くまた君をも思ひ奉りし事多し。

「御めのとの大夫の、けふ日向へ下るに、賜はする扇どもの中に、かたつかたには日いと花やかにさし出でゝ旅人のある處、井手の中將の館など云ふさまいとをかしう

かきて、今かたの方には京のかた、雨いみじうふりたるに、ながめたる人などかきたるに、

あかねさす日に向ひても思ひ出よみやこははれぬながめすらんと

ことに御手づからかゝせ玉ひしあはれなりき。さる君をおき奉りて、とほくこそいくまじけれ」

など云ひしにつけても、君を思ひたる心のほど、おしはかられぬべし。

少納言が初めて宮につかへまつりしは、三十路ばかりにやありけん。年も若からず、まして才もかしこかりしに、流石は女心、物のはづかしき事數知らず、涙もさしぐまるゝばかりなりけるを、皇后なゝめならず慰め馴らし玉ひ、物など仰せ、我をば思ふやなど問はせ玉ひなどして、初めより少納言を、もてなさせ給ふ心の淺からざりけるを、少納言はたゞかしこく、ありがたく、いかで思ひ奉らざらんと啓する折りも折り、之を女房のねたむもの、だいばん所の方にて、はな高くひりたるに、后の宮も少納言がせしとも思ぼさでればしながら、わざと、あな心う、我を思ふとは空事ぞ、よし〳〵とて内へいらせ玉ひぬ。はなひるは人をあざけりなどするときにするものなれば、かくは仰せ玉ひしなり。その折りの少納言が心は如何なりけん。いかでさばかりかしこ

き君をいつはりになど思ひ奉らんやと、心にはかなしう思ひながら、啓しもなほさでありしを、あくる日局におりけるに、皇后宮より玉はりける御歌に、

いかにしていかにしらましいつはりをそらにたゞすの神なかりせば

とておこし玉ひけるに、少納言うれしうも口惜しうも思ひみだれて、

うすきこそそれにもよらね花故にうき身のほどを知ぞわびしき

と御返し奉りけりとぞ。他のものならば、口惜しさに、泣きもしつゝ、人をもとらへてあらがひもすべかりけんを、少納言が心の大なるは、之を初めにて數多く、頭中將齊信の卿が、誰かの讒言をきゝて、清少をいみじう云ひおとし、何しに人とおもひけんなどとて、清少納言の影見ゆる方、聲する方には、袖をふたぎて、顔をも見ぬまでに、いみじう憎みけるを、少納言あやしとは思ひたれど、もとより誠ならぬ事、いつかはおのづから聞なほし給ふらんとて、此方よりも敢てもの云はず過す事二月ばかり、清少納言、つゆばかりも辨じもせず、たゞ清き心に見ながしのみ居りしに、果して中將きゝなほし玉ひけりとぞ。その後、また、ほそどのにあやしき人を笠さゝせて出しけるなど云ふ空言の立ちしにも、清女一向に己れより辨じもせず、すましありけるに、后の宮より、手の限り笠をとらへさせたる書の下に、

みかさ山やまのはあけしあしたより

とかゝせて、をかしう問ひ正させ給へるに、少納言も、いみじうをかしがりて、異紙に

雨をいみじう降らせてその下に

雨ならぬ名のふりにけるかな

さてやぬれぎぬにや侍らん

と、後にはじめて啓したるなどの大度は、誠に女子にはめづらし、あはれ、世擧つてほむるも、すゝむをなさず、世擧つてそしるも退くをまさず。げに人はたゞ此の清女の心に習ひて、たゞ巳が行の眞僞を省だにせば、中々に思ひ安からん。紫のおもとにくらべば、身持ちのおちちる方もあらんが、なべて平安の朝は、最も甚しく淫風の吹きすさびたる時代にて、申すもはゞかりあれど、大内の女房たちの中には、猥などを生ぜしものさへありしとか。されど、紫式部がものせし源氏などの、淫靡にして、よむにたえざる小説にても、いたく目出たがられしを見ても知らるゝ世の中に、清女は、さばかり身もちをよくせしにはあらず、彼の大臣生昌が、夜中忍び來るときも、人をば起し立て、笑ひ返まし、また齊信が語らひよりけるをも、たゞ思ばせかしとばかり云ひ。かつは、かりそめに星の名を記す折さへ、ましてよばひばしなか

らましかせなど口惜しげに書きしなど見ても、さるかゝりはしたなき行の多かりしとも見ねざりけり。まして戸のあけたてにつけ、またはさし出をきらひ、禮を失ふをれとしたるなどは、みな女子がいみじきたしなみとこそは知られけれ。殊にまた淸女が、女子の情にとみたるは、かつて翁丸と云ふ犬のうちたゝかれしを、いみじうあはれに思ひたる。また、

「をかしげなる兒のあからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきてね入りたるもらうたし」

「傍によろしき男のいと忍びやかにぬかなどつく、起居のほど心あらんと聞ねたるが、いたく思ひ入りたる樣しきにて、いねなどもせず行ふこそいとあはれなれ。うちやすむほどは經高く聞ねぬほどに讀みたるも尊げなり。高くうち出させまほしきに、まして鼻などけざやかに、きゝにくゝはあらで、すこし忍びてかみたるは何事を思ふらん。彼を叶へむやとこそおぼゆれ」

「やんごとなき所の名うち云ひて、御産平らかになど敎化などしたる、すゞろにいかならんと、おぼつかなくねんぜらる」

などは、寺にこもりたる折り、ふと感せし情とは知られぬ。

「物云はぬ兒のそりかへりて、人にも抱かれず、泣きたるればつかなし」

「にはとりの子抱きて臥したる」

「にはとりのひなの足だかに白うをかしきが、衣みじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましくなきて人のしりにたちて、ありくも、また親のもとにつれだちてありく見るもうつくし」

「厂の子」「撫子の花」

など凡て幼きものをうつくしみ、折りにふれものにつけ親子の情をあはれがりし心のほど、誠に女子のやさしき情のほど、思ひくむにもあまりありけり。また、此のれもとは、つぎ〳〵しき事をいたく好のまれけり。雪いと高く降りたる日。少納言よ、香爐峯の雪は如何ならんと、帝の仰せられけるに、つと起ちて、御簾を高くまき上げたるは、世に有名なる事實なるが、亦以てその才のさときを見るべし。こは白樂天の詩に遺愛寺鐘欹ㇾ枕聽、香爐峯雪撥ㇾ簾看とありし句を即座に思ひわたりたるなり。實にれどろくべきの慧才機智にあらずや。なほ數多のとん才、學しきのほどは數へつくすべくもあらずかし。かゝかりに才いみじかりけれど、內侍になすべき沙汰などの專らありけるを、口惜しや、皇后の御父上道隆公かくれさ

せ玉ひて、御兄弟ながら御中のよからぬ道長殿の關白し給ひ、上東門院入内ありて、中宮に立せ給ひ、後には伊周公、隆家卿など遠流にされ、皇后の宮も男女の御子など生ませ給ひけれど、不幸にもかくれさせ給ひ、御妹の淑景舎もうちつゞきて失せ給へれば、清少納言も君を失ひ、時を失ひ、萬づわづらはしく、さてはむかし住みける庵に、草深く閉ぢこもりて住む甲斐もなく過ぐされしならん。或はれちはふれて、西國をへめぐりてはてたりしなど云へど、續千載集の雜に、

老の後こもりゐて侍りけるを、人の尋ねまうできたりければ　清少納言

とう人もありとはもこそいひいでね我やはわれとれどろかれつゝ

之によれば、都の邊にこもりゐけるなるべし。他國なれば處をもあぐべきを、さもなけれども契仲の云はれしもげにて、都のあたりにすみしと知るべし。また新古今集に

元輔がむかし住み侍りける家の傍に清少納言すみける頃雪いみじうふりてへだての垣も仆れ侍りければ申しつかはしける

跡もなく雪ふる里はあれにけり何れむかしの垣根なるらん

とあるにてもむかしの住居に居りしにやあらん。

また或説には、清少納言のちに、誓願寺にて髮をそり、尼となりて後、帝の御かへり

みをかうぶり、いみじき往生をとげたりけりとぞ。故に、彼の寺に墓もありき、その寺の縁起にものしおりとぞ。されど、清少納言、時代にあはで、一旦はおちぶれしかど、いまはにはいみじかりけん事、流石は才ありしものゝためしとめでたくこそは覺え侍れ。

その世におちぶれし折り、若殿上人あまた車にのりて、家の前を通り、その家のあれたるさま、垣根のくづれたるなどを見て、少納言は無下にこそなりにけれとて、車の中に云ひけるを、少納言老いさらばいながらも、なほむかしの才氣失せず、簾をかき上げ、駿馬の骨をむかはずやあるとのゝしりかへせし言葉、貧老に屈せざるその氣慨も見えて、げに身體は老いても、その才智のほどは、なほ朽ちざりけり。

清右衛門妻みや

鶴陵散史

天ざかる鄙の人とゝ言ひなくだしそ、禮廢れてこれを野に求むと言ひ。火吹筒もつ炊女とて偏へにな賤めぞ、呉竹の直き操は、なかなかに賤しき身に宿れるが多きぞかし。ましてや天津日の照さむ極み、吾大君の御民、生れ出づる民草の限りは天津御神の御裔なる國民をや。

今は昔、寛保の御時、（今より百四十年ほど前つ頃）大鳥の出羽國大泉庄内飽海郡酒田港臺町に、清右衛門とよべる人の妻に、みやとなむいひける一人の賢しき女ありけり。始めは、清右衛門が家の召仕のものなりけるが、清右衛門が母久しく病み臥せりけるに、みや朝暮晝夜といはず、怠らず撓まず病を看護り、いとねもころに事へ侍りにき、さるからにある時、其の母、清右衛門を側へ呼びていふやう、みや我に事ふること、實の娘といふとも及ぶべからず、且、彼が日頃の行ひを見るに、其の人となり正しくすなはにして、吾家をあづけむに足りぬべし、然るを徒らに水仕女となしれかんは、彼が爲にもいぶさく心うき事なり、はや汝が妻となして、末永く睦しく暮しね、必ずこの家門を高からしめむ者ぞかしとて、遂に清右衛門に配せけり。　かくて二年ぞかりへけるに母、身まかり、間もなく清右衛門が父も煩ひしを、みや之をあつかふこと、姑に事へしが如く、心を盡さすといふことなし、近隣のものども訪ひきぬれど、父、みやが孝養を語りて喜ぶ。かくて、父も終にみまかりぬ。是より先、清右衛門が兄忠七、故ありて松前に行き、かしこに住つきて、年毎に酒田に來り萬の商ひをなしけるが、ある年買賣くの爲にいたく損毫をなしぬるより、手許も意の如くならず、從ひてこゝかしこに、負債など澤に高みにける後は酒田にも來ずなりぬ。さるによりて、債主いたく憤りをな

して、其か證人となりにける清右衛門を責めはたれること嚴しく酷しかりけれど、清右衛門、是にはたはず、遂に金を調へ來べしとて、松前なる兄の許に渡りにき。然れど忠七は不幸打つゞきて、竈には烟吹き立てず、こしきには蜘蛛の巣かきて、飯炊ぐこともたはく〳〵なる樣なりければ、清右衛門も如何にともせんすべなくて、いたづらに松前に年を經へけり。

酒田にて、夫清右衛門歸らざれど、妻のみや一人の手末の業なる針仕事、洗ひ張りなどして、御上への納税をも怠ることもなく、清右衛門が妹と、其の年生れたる娘を養ひ居つるに、剩へ其の翌年迦具土の荒びにかゝりて、家屋みながら燒け失せけれど、再び建ひ力もなきをもて、傍の小屋を借りて住みにき。よて又みやが實母と其の邊にいと貧しくて居けるを我方へ引取り、己が娘をもてこれに見つがせて、我は針業洗張りに日を暮し、家内三人を養ひ立て、いさゝか倦める氣色をも見せで過ぐしぬるに、清右衛門が妹年頃にもなりぬれど、同じ所に緣を結びたれど、衣類を調へむ便りもなきを、みや日頃貯へ置ける衣類を皆がら遣して、其の身は布片衣のいと見ぐるしきを着て、いさゝかも心苦しともせざりけるこそ、なか〳〵にめでたき眞心になんありける。かくてみやが實母も、六年ほど前に病みて亡せぬるに、病中の看護舅姑の病める時と異

ることなかりき。
清右衛門は、松前にて年月を經るも、世をわたらふ手づきもなきものから、せんすへなく或商家の聟となり、今は子さへ擧げたりと聞えぬれば、近き邊の者ども、みやにいへるやう、五年六年ころさてもありぬれ、今は清右衛門も松前にて妻子も有りといへば、何方へなりとも身を寄せねかしと、ねもころにすゝむれども從はず。又はこのみやが操の貞しきことを、人々聞き傳へて、よろしき所より言ひ入るゝこと多けれど、ふつにいらへもせざりけり。わりなくいふ者あれば、みや曰く、夫清右衛門松前に妻子ありといへど、其は故こそあらめ、我はつゆばかりも恨みとせず、吾夫我前にて路頭にも迷はずと聞けば、なか〳〵うれしく悦ばし、かつは神佛へも我夫の身の上の幸をこそ祈り奉れ、かくせなば時ありて歸り來ん時もありなまし、よし歸らずとも娘の人とならば、聟を迎へてこの家を再興さしむべし、我此家を去らんこと思ひもよらずとて、一向に心を許さゞりき。かくて數年の間、女暮しにて身を愼み、町役にて納金すへき時あれば、町長の命令を重んじ、一たびも催促せられしことなく、はた大風吹き、さらでも物騒しき夜には、冬の衾のさゆる夜なりとも幾たびとなく起き出でゝ、家の邊を見廻りぬるに、夜廻りの者など見つけて、詞をかくれば小用に起きたるなり

といらへ、女のさかしら立ちて、夜廻するなど言はれんことを、うし恥しく思へりけるとぞ、なかなかに有がたき用意なる。又菩提寺二か所あるに、先祖の忌日佛事など

さるべき時々には、身のほどに從ひて、供物を怠らざれど、寺詣でとてはなさゞりき。

其は金借りたる人の手前を憚りて、晝出で、はれぐしく世の人にあふことを嫌へるなりとぞ。又近き邊に洗湯屋などあれど入ることなく、親族の方に用事ありても、暮るゝを待ちて出で行き、用事畢りぬれば速かに歸りけり。又隣の人、さては親しき人など、みやの平生の辛苦をいたはらんとて、物見などに誘ひても、堅くいなみて行くこともなし。かくて年月を經ること十六年、其の間わづかの暇にも綿をとり、糸をうみ、木綿麻なども手織りして、時々は便を求めて、松前へも遣すなど、やさしともやさしうなん。又燒屋敷は人に借し、少しつゝの地代を取り、夫をば取り除け置きしに、四五年前其の尾敷に造れる小やを賣らむと言ひしをもて、かの貯へ置ける金一兩を出して之を求め、かしこゝつくろひて元の屋敷へ歸りて、己の家に住むことになりにけり。みやが振舞かくの如くなりければ、町の長もいたく其の志をめで、其の心を憐み、清右衛門が甥なる彌兵衛といふ者をもて、債主の方に言入れしめけるは、忠七今は松前にて、あさましき躰にて世を渡るとぞいふなる、いかでかこゝらの金などをとみに

返すことを得べき、こゝをもて淸右衛門も古里に歸ることを得せるをもて、其の妻女みや女暮しにてうき年月をわたりて、其の艱難の狀言ふばかりなく、見るも涙ぐまるゝぞかし、願くば是までの憤りをなだめね、さらんには淸右衛門を松前より呼び返して、彼の妻子が永き歎き釋かんと演べけるに、債主も元より岩木ならねば、さすがに眞心の動きたりけん、所よくうべなひけるをもて、やがて其の年元文五年彌兵衛松前にわたりて、其の由を言ひければ、淸右衛門は恰もから國の蘇武とやらんが、本國に歸り來ん心地して、天へも翔りつべく悅び、二人連れ立ちて十六年目とて、已が故鄕に歸り來たるに、妻子我を忘れて手足に取りつきて悅びけるとなん。寔に其の狀今より思ひやるさへ理なり。

あはれ、つゝまんとすれど其の鋒表れ、掩はんとすれど其の光洩るゝものは、わざとならぬ匂ひ、たぐひがたなき人の眞心ぞかし。みや子が行やう〳〵世にひろがりて、遂に寛保元年町の役所よりは黃金を與へられ、猶庄内の大守酒井左衛門尉殿よりは、數石の御米を下し賜びて、其の善行を稱へ、其の名を閭門に旌表し玉ひけるころ有がたく亦目出たけれ。

散史曰、上に述ぶる事は、羽州庄内孝子傳といふ寫本の小冊子に資りて、かきつけ

たるなり。寔にみや子の如きは、都遠き出羽の僻境なる、賤しき家に生れ、難波津淺香山の跡さへふみ見しこともなく、わづかの教育もなきものなるに、其の心の至りは神ながらなる吾神國の、玉矛の道に適ひ、其の行の高潔なること、内日刺花の都にて、高等の教育をうけたる、今の世の婦人達の中に、この右に出づるもの恐らくは稀なんめり。この傳をとり見む、人文辭の拙きを責めで、みや子が其の國なる鳥海山なす高き操を分け見、最上川なす深き意のある所を酌み見られん事をこそ。

ひなつ女と言ひなくたしぞ月山の高き操のこのさかしめを
人みなのかゞみとなれり酒田びと敎のにはに立ちわ寄らねど

編者誌す。みや子の傳は外に三矢重松ぬしより贈りこされたるものあれど、重復をいとひてこゝに載せず。たゞその評のみを左に掲ぐ。

みやは一賤女にすぎず。然れども、婢としてはよくその主に忠。妻としてよくその家を守りて失はず。夫他國に出でゝ年あり、人是を怨みしむるに妻子あるを以てすれども迷はず、十有六年の經營六尺の男子を恥かしむるものあり。而もその行常に女子柔和の道を失はず、何ぞ欽慕に堪へむ。かゝるをや世に女子の師とはいはめ。清右衛門が母、また人を知るに明なるものといふべし。



たちぬひ

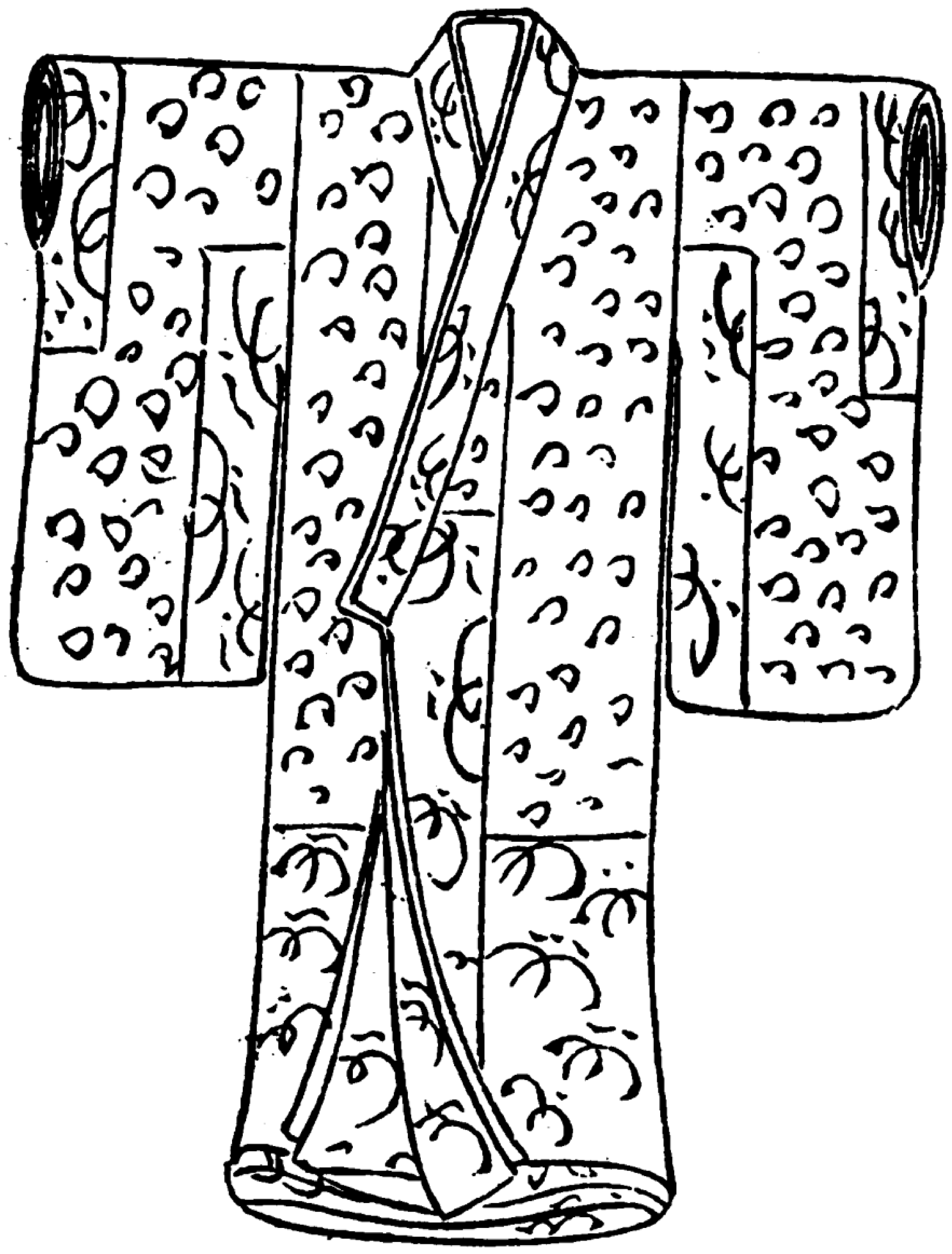
西山たい子

（六十九）下着無垢比翼の縫ひ方

まづ、下着胴拔ものをぬひし如く、まづ廻りの切を胴にぬひつけ、裏にも裾まはしをつけし如くにしてつけ、一重の綿入をぬふ如くにしてぬひ、綿を入れて、引きかへせむ、即ち一枚の綿入となりて、なほ廻り切は殘りをるべし。さて、その綿を入れたるもの丶、袖だけを絎け上ずして、そのまゝにおき、胴の方は、褄下より、襟まはり、みなくけ上げ、のとじ裾とじ、みなすましおき、それより殘りをる裾まはりの切をとりて、後巾、前巾、衽巾、どうをくけ上げし上着にくらべて、裏表ともぬひ、褄をも上着と同じやうに造りぬひ、綿を入れて、引きかへし、裾の方をよく上着に合せつけ、上の方をぬひてみだけ折りて、上着のうらに背に背を合せ、脇に脇を合せて、きれいに絎けつくるべし。襟をもまた最初につくりおきて、上着のうらに絎け付くべし。それにて胴は比翼となりしなり。

さて、袖は、まづ表袖口に、殘りたる袖口の切をと

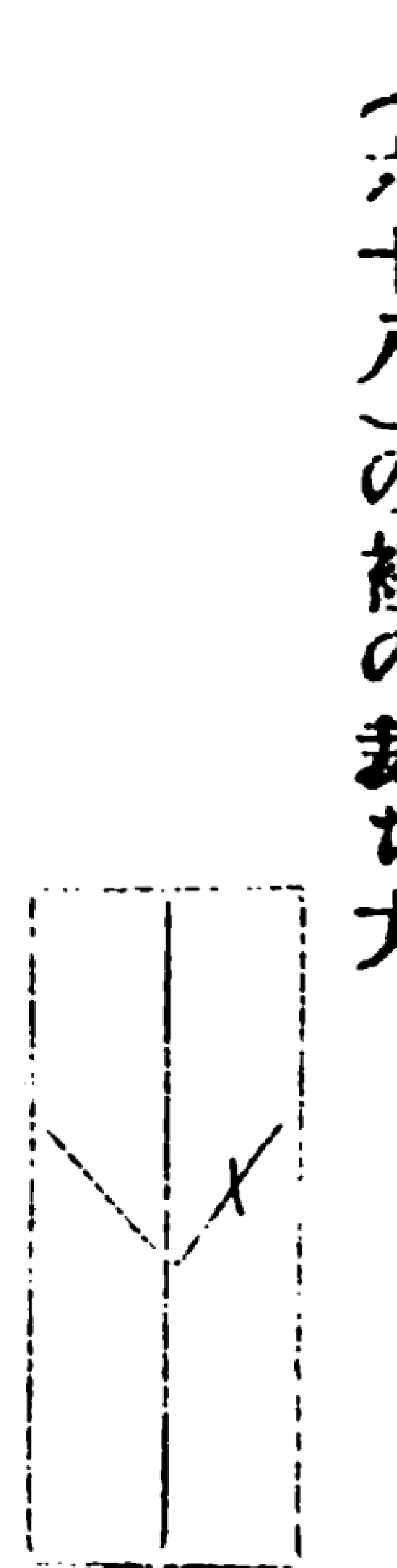
りて綿をふくみ、よきやうに袖口をくけ造り、今一つ殘り居る袖口切をとりて、その造りし袖口のうらにぬひつけ、下袖口に綿をふくみてくけつくるべし。ふりもそのやうにするなり。さて、それにて袖口も、ふりも、二枚となり、胴はたゞ一枚となる、さるを比翼とは云ふなり。



その縫上りの圖

正誤

（六十八）の衽の裁ち方



造花

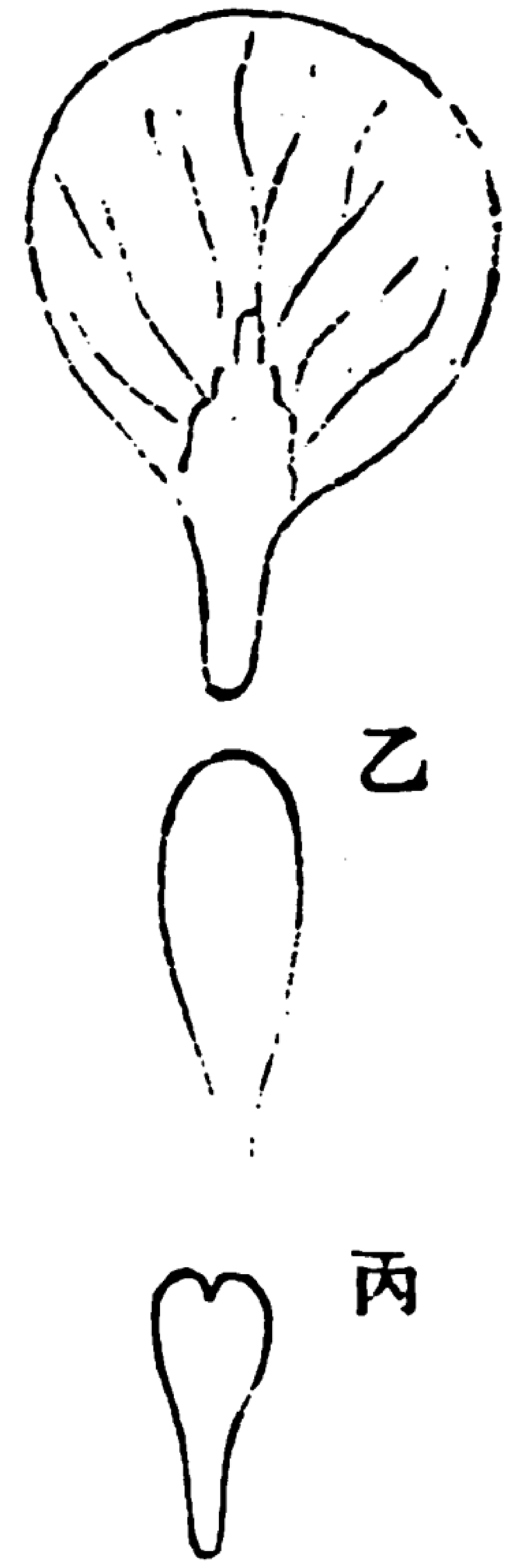
共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

菖蒲

滿開花の造り法　花瓣には、絖、又は寒冷紗を用ゐて、第七十五圖の如く、甲乙丙三種の形に何れも三枚づゝを斷ち、寒冷紗なれば そのまゝ、絖なれば薄糊を引きて、色染は、紫に造るには、「ピオレット」にて花瓣の先を模糊しに染め、元は「オウア

ミ」にて薄黄色に染む、斑に造るには、花瓣を少しく濕して、もとに置き、其の上に、筆にビオレットの溶液を充分に含ませたるものを臨ませ、細き撥切にて筆の軸を輕くはたき、花瓣に斑點を散りかゝらすなり。斯くして后、

第七十五圖



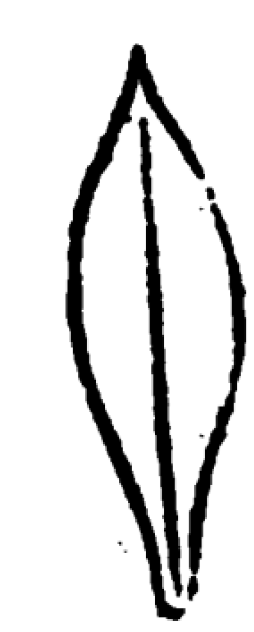
甲乙の花瓣は、第百十九號に示したる櫻の葉と仝じ樣に、花瓣を中央より縱に二つに折りて、之を布の上に置き、上を左の手の掌にて輕くおさへ、右の手にて花瓣の元を握り折りたる方を脊にして横に引き廻すときは、花瓣は自然に絞らるゝなり。斯くして后、その二つに折りたるを開けて、稍花瓣の形となるべし。さて丙はそのまゝにて、之を纏むるには、

先づ鐵の針金に、小さき筆の軸ぐらゐの太さに靑紙を巻きつけて、その上端に、前の花瓣乙一枚をはじめに糊にてつけ、之の外側に重ねて丙一枚をつけ、又その外に甲一枚を着け、第七十六圖の如くす。斯の如くして之と同じ樣に、三方より宜しきくぜりに着け、后萼を着く。(第七十八圖參照)萼は、寒冷紗を葉と仝じ色にそめて第七十七圖の如き形にたち、之を縱に二つに折りて兩方を鏝にて少しく脹らませ、仝じもの二つを造りて、之を花のもとに、二枚向き合せに着くべし。

第七十六圖



第七十七圖



蕾の造り法　滿開の莖と仝じく、鐵のはりがねに青紙を卷き、その上端に稍太く長めに綿を卷きつけ、之に甲の花瓣三枚を内部に向けて三方よりつけ、花瓣と花瓣とは、ふちに糊をつけてつぎ合せ、中の綿の見ゑざる樣にすべし。萼を着くること滿開に仝じ。

葉　は、絖、又は寒冷紗を（絖は縱目に用ゆ）葉の形に斷ちて、之を色染すべし。色染は、普の葉の色に、「オウラミ」七分「グリン」一分五厘「マセンダ」五厘を溶きて合せ、明礬少許を加へてそめ、絖なれど裏より眞中に細きはり金をつけてろの上に表と同じ色同じ大さの寒冷紗を貼り着くべし。寒冷紗にて造るものは細き針金に青紙をまきて、裏より眞中に着くれどよし。纏め方は、時節のものなれど、實物を見て好みの風につくるべし。凡て、溪蓀、菖蒲　燕子花ともに花は大抵仝じ樣のものにて、造りかたにも別に區別するに及ばず。たゞ形の大小、風の小異は、それ〴〵斟酌して造れどよし。されど注意すべきは、菖蒲は葉より花高く上に出でゝ開き、溪蓀、燕子花は、葉よりも下に花の咲くものなれど、花を造らんものは、これらも心すべきことなり。

第七十八圖



だいどころ

火腿の全煮

火腿は、永く貯へ置きしものなれば、先づ之れを煮る前、一晝夜程冷水に浸して軟かになし、又、之れを煮るには、大なる鍋に投れ、多量の水を投し、大小に從ひ三四時間、徐かに沸騰させ、湯の上に浮みあがりたる脂膀をすくひとり熟するを待、上面に麵包粉をふりかけ火にて之れを乾かし、褐色になし、青菜、又は「キャッベージ」と共に皿に盛るべし。

豚の切肉の煮方

先づ、豚肉の脂膀を去り、之れをこまかくきり、又球葱を二三分位に刻み、能程の牛酪を加へ、肉とともに鍋に投れ、其葱の薄褐色になるまで いりつけ、米利堅粉、食鹽、胡椒等を能くかきまぜ、能程の湯を注して、文火にて煮ること三四十分間にして用ふべし。

胃の煮方

牛、豚の胃を生にて、購ふ時は 先づ汚物を去り、久しく煮て、十分軟かにすべし。其時間は、稚きものは六七時間、老たるものは十時間を要す。其胃は、煮るまへ鹽水にて能く洗ひ、度々しごきて、粘液を去り、能程の鍋に冷水を注ぎ 此中に投れて沸騰せ、其湯をこぼして胃を再び淸水につけ、それより前に示せる時間を、文火にて煮るべし。若し武火にて早く煮る時は、之れを硬くなすなり。又煮始める時、少量の曹達を其湯に、投ずべし、これは、煮あがりたる後、胃の色を、美くするがためなり。調理熟したれば、胃を能程にきり、別に加味物なしに用ゐんに

は、之れを切肉皿に盛り、其煮汁少量をかけ、胃と共に煮たる玉葱と、能程の食鹽を加へて用ふべし。また之れをうまく調味するには、煮たる後、其汁より出し、他の鍋に投じ、胃二斤に、一合五勺の牛乳、大匙二杯の米利堅粉、三匁の牛酪を和し、濃厚となし、之れを盛る時、能程の胡椒、食鹽等にて、鹽梅すべし。



學園

雨江此の頃、腦充血にて、筆とる事能はねど、試みにかはりものし侍るなり。をかしき所も、足らぬ節もあらむ、後に雨江の補ひも正しもありなむ。

新古今和歌集講義　（九）

鹽井ふく子

和歌所にて春山月と云ふ心をよめる

山ふかみ猶かげ寒し春の月　越前
空かき曇り雪はふりつゝ

○山深みは、先きにもありたる詞にて「山の深さに」と云ふ意なり○なほ影寒し春の月「春の月影がなほ寒し」と云ふ意なり○空かき曇りのかきは、つけ言葉にて、意味あるにあらず、空くもりと云

ふと同じ意なり○「雪はふりつゝ」の「ふりつゝ」は「ふりつふりつ」してはと云ふ意なり

○一首の意は、もはや春なれど、月の影ものどかにさすべきを、山の深き故に、なほ月影が寒い、空も曇りて、雪はふりつふりつしてとの意なり。本居翁の説に、春の心働かずと云へど、されど、それはあやまりなり。山の深き故に、春の月影が寒しと云ひたるなれど、「山も春もよく聞ゆるなり。

詩をつくらせて歌に合せ侍りしに水郷の春望と云ふことを

みしま江や霜もまだひぬ蘆のはに　つのぐむ程の春風ぞふく　左衛門督通光

○通光は内大臣源の通親の子にて、後久我太政大臣と稱せし人なり。

○三島江や攝津の國にある入江なり。やは、とも呼びかけの「や」と呼びて、別に意味なし「みよしのやよしの山」「近江のや鏡の山」などいふは、古のつかひざまにて、必ず廣き場所の中より、小さき場所を取り出して云ふ時用ゐたり。此處にのの意にやを用ゐて、直に霜につゞけたるは、此の時代よりのつかひざまにて、古の格にあらず。このやのつかひざまは惡しきなり○あしの葉には「蘆のかれ葉に」にて、かれと云ふ字を略せしなり○つのぐむ程の、つのぐむは、蘆の葉の芽のきりの如くに、とがりて萠え出すさまを、つのぐむと云ふなり。角は獸の角もおなじにて、角の如くめぐむと云ふ意なり。程のは、「ばかり」と云ふ意なり。

○一首の意は、みしま江の蘆のかれ葉には、まだ霜さへ乾かずあるに、いつかもう下には蘆の葉の芽ざすばかりに、あたゝかげなる春風が吹くよと

云ふ意なり。

此歌、實際ならず。そは、霜のおく朝に、風はふかぬものなれど、實地をかまはず、面白味を主としてよみし歌なり。

夕月夜汐みちくらし難波江の
　　蘆の若葉をこゆるしら波　　藤原秀能

○秀能は鎮守府將軍秀卿の後胤、河内守秀家の子にて、十六歳にて後鳥羽天皇の北面に召され、堂上を許され、新古今集を撰びしとき、和歌所の寄人に加へられたる人なり。

○夕月夜、夕月夜小倉の山など云ひて、夕は月の光もさやかならぬもの故、春の月のおぼろなるさまを云ひしなり○汐みちくらし「汐がみちてくるらしい」と云ふ意なり○難波江は、攝津の國にある湊にて、むかしは蘆の多くはえをる處なりき。

○一首の意は、夕づき夜おぼろでよく見えねども、どうも、汐がみちてくるらしい、此の難波江の入江の蘆の若葉をそろ〳〵と、白波がこゆるとの意なり。

月のうつりたるを白波のこすやうに見たる歌との説もあれど、それは意淺き説なり。月の出ると共に、汐もみちくるものなれど、月にも汐にもかけて云ひしにて、歌がらも、心もいとおもしろく、めでたき歌なり。

春の歌とて　　西行法師

降りつみし高ねのみ雪とけにけり
　　清瀧川の水のしら浪

○清瀧川は、愛宕高雄の麓にある川なり。されど、高ねと云ふは、愛宕高雄などの山の事なり。

○一首の意は、降りつみし高嶺の深雪もとけたで

あらう、ふもとにわる清瀧川の水が、白波となりて、わきかへり流れきたとの意にて、三の句、とけにけりのけりは、茲には想像の意に用ゐぬ。通常のけりとは、意異なるなり。

漢文學講義（七）

大林弘一郎

紀徳川義公事　安積信

信字は、思順、通稱は祐助、艮齋、又、見山と號す。東奥郡山の人なり。萬延元年歿す、年七十。

公致位後。居西山。茅檐笆籬。堂廡儉樸。不類大藩ノ苑囿矣。池植芙蓉。山口栽桃數百株。有川圯橋架焉。二三月之交。紅霞輝映。波作臙脂色。花落鳥啼。漁人欲迷。曰桃源橋。園中放鹿養鶴。皆馴人不驚。公日逍遙其間。如山叟野龐。人間軒冕之榮。泊然不入懷。作壽壙於瑞龍山。瘞衣冠。建碑。親製文刻之。朱舜水卒。葬其側。爲校遺集。鋟諸版。稱門人中納言源某校。儒林以爲榮。舜水名之瑜。字魯璵。舜水其號。浙江餘姚人。明亡航海抵崎。寓。公聘之。待以賓師之禮。舜水感歎謂。公尊道隆儒。過魏文侯遠矣。（名賢言行略）

此の篇は、名賢言行略といふ書の中より抄録したるものなり。公とは、義公なり。義公位を其の兄頼重の子綱條に譲りて後、水戸城より五里ほど隔ちたる西山に隠居し、茅葺の家、笆籬即竹の籬柴垣の類を廻らし、堂もひさしも儉素質樸なる造り方にて、實に三十五萬石の藩侯の隠居所には似合はぬ有樣なり。苑囿とは、もと支那の魯の地名なり。隱公この地に隱居所を作らんといひしことありし

より隱居所の異名の如くなりしなり。

さて、西山は、もと草木生ひ茂れりしを、その草木を剪り取り、地を平にし、又池を穿ち。芙蓉とは蓮なり。蓮を植ゑ。山の入口に桃の樹數百株を植ゑ。太田川には圯橋即土橋を架けられたり。されど、二三月の交。交とは際、または、間といふ意なり。この頃になれど桃花滿開して、紅の霞のたなびけるが如く、川水に輝りかゞやきて、波の色は殆臙脂の如くに見ゆ。臙脂は繪具に用ゐて、赤き色なり。

さて、そのわたりは花落ち鳥啼き、まことに、幽靜なる處ゆゑに、彼の支那の武陵の桃源の如き有樣にて、漁人も路に迷はんばかりの景色なり。(この漁人のことは、晉の陶潛が桃源記といふものに出でたる故事なり、事煩しければ、こゝには略す。後にまたいふ所あるべし。)ゆゑに桃源橋と名づけたり。園中には、また、鹿を畜ひ、丹頂の鶴一つがひやしなはれたるが、皆人に馴れて、驚かず、公は日々にこの間に、逍遙、即、ゆきつもどりつして遊び樂み、その樣、殆山叟野麗、即、山夫野老の如く、人間の名利榮華などは、胸懷の中に入らざる有樣なりき。軒とは大夫の乘る車をいふ。冕とは、公卿の冠なり。泊然は、あは〳〵しくさつぱりしたることには、いさぎよく名利を棄てたることを形容したるなり。公は自、壽壙即在世中に家穴を瑞龍山に作り、こゝに衣冠を埋め碑を建て、親文を製りて石に刻し梅里先生の墓と題せられたり。朱舜水が卒せしときには、その側に葬り、またその文集をも校訂して、之を版に上し、門人中納言源某校としるされたり。儒林即儒者中間にては、この事をもてまことに榮譽なることゝ爲しぬ。

この舜水は、名は之瑜字は魯璵といへり。舜水はその號なり、明の浙江省餘姚といふ所の人なりしが、明亡びたれど、海を航して、崎嶴に至れり。こは長崎の事なり。地名をかく書きかへて見るは往時の漢學者の一時の弊風なり。さて、公はこの舜水を招聘し、賓師、即、客分師分の禮を以て取扱はれたり、舜水のその優待に感じて、歎じていひけるは、公の道を尊びて儒者を手厚く取扱はるゝことは、昔の魏の文侯にも過ぎたること遠しといひけるとぞ。

抑公のこの西山に隱居したりしは、深きゆゑあることにて、公は十八の時に史記を讀みて深く感じて、自弟を以て兄に踰ゑて讓を受けたるを心に愧ぢて、國を兄の子に讓らんことを思ひ、後遂にその志を遂げ、遂に彼の西山に因ある西山に閑居して、伯夷の志節をも慕はれしなり。梅里といふも、伯夷の生れたる地の名なれどとて、號とせられたりといふ。かく道義を重んじたる人なれど、深く尊王の志を抱きて、大日本史を編し、大義名分の亂れたるを正し儒者國學者を多く招きて、我が國の學問を盛にし、内外の別を正されたるなり。舜水を招かれしも、彼が節義に感じてなり。この公の英風大略は、なか〳〵述べ盡しがたし。この一章は、たゞ、その晩年の一斑なれども、略その高節の程を知るに足るべし。

公平居尚儉素、愛惜楮紙、退老後、藏簡牘封裏、無長短必接聯用之、賦詩起稿必用反故紙、穢水於廁、必拭之以布、不以紙、誡仕女勿多費紙、未能從。一日、公謂之曰、觀製紙甚樂、盍一寓目乎。皆喜欲往、乃遣仕女數十於松草村觀焉架

棚於川原、布蒯席、四無障壁、時嚴冬寒氣刺骨、製紙者皆赤脚入水、操作甚苦、仕女大駭、又不耐寒冷、不能久視、既還白狀、公曰、製紙之勞、乃爾吾所以誡汝曹也、由是不敢濫費（同上）

公、また、つねに儉素を尙び、紙を愛み、退老して後にも、書狀などの封皮をとゞ、たくはへ置き、長きも短きも之を接ぎ合せて、入用ある時に之を用ゐ、また歌詩などを作られんとて、草稿を起す時には必反古紙を用ゐたり。席の上に水をこぼしたる時などには、決して紙にて拭ふことなく、布もて之を拭はれき。かつて召仕の女どもを誡めて多く紙を費すこと勿らしめしかど、とかく、その言に從はぬものありしかば、ある日のことに、公いはるゝやうは、紙を製造する所を觀ることは、甚樂しきものなり。汝等など一たび之を見ざるや。と、侍女どもみな喜びかしこまりて、往いて見んことを請ひぬ。乃、仕女等數十人を近傍松阜村といふ所につかはして紙すきを觀せしめられたり。その日棧敷を川原に作り、蒯席菅むしろを布き、四方とも障子もなく壁もなければ、嚴寒の時にてありし故、寒氣身に透りて骨をも刺す計なり。かゝる日にも、紙を製するもの等は、皆、足を出して水中に入り仕事をなすこと甚つとめたりしかど、仕女等は大に駭き、またその身寒さに耐へかねて久しく見ること能はずして返りぬ。既にして、そのさまを公に白したりしに、公のいはるゝやう、紙を製するは、彼の如く勞苦するものなり。吾がつねに汝等を誡むる所以なりと。曹はともからなり。是よりして仕女どもは、敢て紙をみだりに費さゝるうになりたりといふ。

公の如き遠大なる思慮ある人にして、かゝる些細ある事にまでよく注意したるものは、實にその人となりの常人に過ぐること萬々なることを知るべし、公の英主を以て稱せらるゝことまことにゆゑあるなり。

漫錄



雨月物語

蛇性の婬

上田秋成

いつの時代なりけん、紀の國三輪が崎に、大宅の竹助といふ人ありけり。此の人、海の幸ありて、海郎どもあまた養ひ、鰭の廣物狹き物を盡してすなどり、家豐に暮しける。男子二人、女子一人をもてり。太郎は質朴にてよく生産を治む。二郎の女子は大和の人の娶に迎へられて彼所に行く。三郎の豐雄なるものあり、生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。父是を憂つゝ思ふは、家財をわかちたりとも、即て人の物となさん、さりとて他の家を嗣しめんもはたうたてき事聞らんが病しき、只なすまゝに生し立て、博士にもなれかし、法師にも

なれかし、命の極は太郎が羈物にてあらせんとて、強て掟をもせざりけり。此の豐雄、新宮の神奴安倍の弓麿を師として行通ひける、九月下旬、けふはことになごりなく和たる海の、暴に東南の雲を生して、小雨そほふり來る、師が許にて傘かりて歸るに、飛鳥の神秀倉見やらるゝ邊より、雨もやゝ頻なれど、其所なる海郎が屋に立よる。あるじの老はひ出で、こは大人の郎子の君にてます、かく賤しき所に入せ玉ふぞいと恐まりたる事、是敷て奉らんとて、圓座の汚なげなるを清めてまゐらす。霎時息るほどは何か厭ふべき、なあはたゝしくせそとて休らひぬ。外の方に麗しき聲して、此の軒しばし恵ませ給へといひつゝ入來るを奇しと見るに年は廿にたらぬ女の、顏容髮のかゝりいと艷ひやかに、遠山ずりの色よき衣着て、了髮の十四五ばかりの清げなるに、包みし物もたせ、しとゞに濡てわびしげなるが、豐雄を見て、面さと打赤らめて恥かしげなる形の貴やかなるに、不意に心動きて且思ふは、此の邊にかうよろしき人の住らんを今まで聞えぬ事はあらじを、此は都人の三つ山詣せし次に、海愛らしくこゝに遊ぶらん、さりとて男たつ者もつれざるぞいとはしたなる事かなと思ひつゝ、すこし身を退きて、こゝに入らせ給へ、雨もやがてぞ休なんといふ。女しばし宥させ給へとて、ほどなき住ゐなれば、つひ並ぶやうに居るを、見るに近まさりして、此の世の人もと思はれぬばかり美しきに、心も空にかへる思ひして、女にむかひ、貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし玉ふらん、峯の温泉にや出立給ふらん、かうすさまじき荒磯を何の見所ありて狩くらし玉ふ、こゝなんいにしへの人の

くるしくもふりくる雨か三輪が崎
佐野のわたりに家もあらなくに

と、よめるは、まことけふのあはれなりける。此の家賤しけれど、をのれが親の目かくる男なり、心ゆりて雨休侍へ、そもいづ地旅の御宿りとはし給ふ、御見送りせんも却て無禮なれど、此の傘もて出給へといふ。女いと喜しき御心を聞ゑ給ふ、其の御思ひに乾でまゐりなん、都のものにてもあらず、此の近き所に年來住こし侍るが、けふなんよき日とて、那智に詣侍るを暴なる雨の恐しさに、やどらせ給ふとも志らで、わりなくも立よりて侍るこゝより遠からねど、此の小休に出侍らんといふを、強に此の傘もていき給へ、何の便りにも求なん、雨は更に休たりともなきを、さて御住ゐはいづ方ぞ、是より使奉らんといへど、新宮の邊にて、縣の眞女兒が家はと尋ね給はれ、日も暮なん、御恵の悦ぞを指戴て歸りなんとて、傘とりて出るを見送りつも、あるじが簑笠かりて家に歸りしかど、猶俤の露忘れがたく、志ばしまどろむ曉の夢に、かの眞女兒が家に尋いきて見れば、門も家もいと大きに造りなし、蔀おろし簾たれこめて、ゆかしげに住なしたり、眞女兒迎出で、御情わすれがたく待戀奉る、此方に入らせ給へとて奥の方にいざなひ、酒菓子種々と管待しつゝ、喜しき醉こゝちに、つひに枕ともにしてかたるとれもへど、夜明けて夢さめぬ。現ならましかばと思ふ心のいろがしさに、朝食も打忘れてうかれ出ぬ。新宮の卿に來て、縣眞女兒が家はと尋るに、更にしりたる人なし、午時かたふくまで尋勞ひたるに、かの了彌東の方よりあゆみ來る、豊雄見るより大に喜び、娘子の家はいづくぞ、傘もとむとて尋來るとい

ふ。わらは打ゑみて、よくも來ませり、こなたに歩み給へとて前に立てゆく〳〵、幾ほどもなく、こゝぞと聞ゆる所を見るに、門高く造りなし、家も大きなり、ゑとみれろしすだれたれこめしまで、夢の裏に見しと露違はぬを奇しと思ふ〳〵門に入る。わらは走り入りて、れはがさの主詣給ふを誘ひ奉るといへど、いつべにますぞ、こち迎へませといひつゝ立出るは、眞女子なり。豊雄、こゝに安倍の大人とまうすは、年來物學ぶ師にてます、彼所に詣る便に、傘とりて歸るとて推て參りぬ、御住居見れきて侍れど、又こそ詣來んといふを、眞女子强にとゝめて、まろや努出し奉るなといへど、了髮立ふたがりて、れはがさ强て惠ませ給ふならずや、其がむくひに强てとゞめまゐらすとて、腰を押て南面の所に迎へける、板敷の間に床疊を設けて、几帳、御厨子の飾壁代の繪なども、皆古代のよき物にて、倫の人の住居ならず。眞女子立出て、故ありて人なき家とはなりぬれど、實やかなる御饗もえし奉らず、只薄酒一杯すゝめ奉らんとて、高杯平杯の淸らかなるに、海の物山の物盛ならべて、瓶子土器擎げて、まろや酌まゐる。豊雄また夢心してさむるやと思へど、正に現なるを却て奇しみゐたる、客も主もともに醉心ちなるとき、眞女子杯をあげて、豊雄にむかひ、花精妙櫻が枝の水にうつろひなす面に、春吹風をあやなし、梢たちかづく鶯の艶ひある聲していひ出るは、面なきことのいはで病なんも、いつれの神になき名負すらんかし、努漫なる言にな聞給ひぞ、故は都の生れなるが、父にも母にもはやう離れまゐらせて、乳母の許に成長しを、此の國の受領の下司縣の何某に迎へられて伴なひ下りしは、はやく三とせになりぬ。夫は任

はてぬ此の春かりそめの病に死玉ひしかど、便なき身とはなり侍る。都の乳母も尼になりて、行方なき修行に出しと聞ど、彼方も又志らぬ國とはなりぬるを、あはれみ玉へ、きのふの雨のやどりの御恵みに、信ある御方にこそとおもふ物から、今より後の齢をもて御宮仕へし奉らむやと願ふを汚き物に捨玉はずぞ、此の一杯に千とせの契をはじめなんといふ。豊雄、もとよりかゝるをこそと亂心なる思ひ妻なれど、時の鳥の飛立ばかりには思へど、おのが世ならぬ身を顧れは、親兄弟のゆるしなき事をと、かつ嬉しみ、且恐みて、頓に答ふべき詞なきを、眞女子わびしがりて、女の淺き心より、嗚呼なる事をいひ出て、歸るべき道なきこそ面なけれ、かう淺ましき身を海にも沒で、人の御心を煩はし奉るは罪深きこと、今の詞は徒ならねども、只酔こゝちの狂言におぼしとりて、こゝの海にすて玉へかしといふ。豊雄、はじめより都人の貴なる御方とは見奉るこそ賢かりき、鯨よる濱に生立し身の、かく喜しきことをいつかは聞ゆべき、即の御答へもせぬは、親兄に仕ふる身のおのが物とては爪髪の外なし、何を祿に迎へまゐらせん便もなければ、身の徳なきをくゆるばかりなり、何事をもおぼし耐玉はゞ、いかにも〳〵後見し奉らん。孔子さへ倒るゝ戀の山には、孝をも身をも忘れてといへど、いと喜しき御心を聞まゐらするうへは、貧しくとも時々こゝに住せ給へ、こゝに前の夫の二つなき寶にめで給ふ帶あり、これ常に帶せ給へとてあたふるを見れば、金銀を飾りたる大刀のあやしきまでに鍛ふたる古代の物なりける。物のはじめに辭なんは祥あしけれどとてとりて納む。今夜はこゝに明させ給へとて、あながちにとゞむれど、まだ赦な

き旅寢は親の罪し玉はん、明の夜よく僞りて詣なんとて出ぬ。其の夜も寢がてに明ゆく。太郎は網子とゝのふるとて、晨て起出で、豐雄が閨房の戸の間をふと見入たるに、消殘りたる灯火の影に、輝々しき太刀を枕に置て臥たり。あやし、いづちより求ぬらんとればつかなくて、戸をあらゝかに明る音に目さめぬ。太郎があるを見て、召し玉ふかといへど、輝々しき物を枕に置きしは何ぞ、價貴き物は海人の家にふさはしからず、父の見玉はゞいかに罪し玉はんといふ。豐雄財を費して買たるにもあらず、きのふ人の得させしをこゝに置しなり。太郎いかてさる寶をくるゝ人此の邊にあるべき、あなむつかしの唐言書たる物を買たむるさへ、世の費なりと思へど、父の默りてればはすれど今までもいはざるなり、其の太刀帶て大宮の祭を遨やらん、いかに物に狂ふぞといふ聲の高きに、父聞つけて、徒者が何事をか仕出づる、こゝにつれ來よ太郎と呼に、いづちにて求ぬらん、軍將等の佩玉ふべき輝々しき物を買たるはよからぬ事、御目のあたりに召て問あきらめ玉へ、れのれは網子どもの怠るらんと云捨てゝ出ぬ。母、豐雄を召して、さる物何の料に買つるぞ、米も錢も太郎が物なり、吾主が物とて何をか持たる、日來は爲まゝにれきつるを、かくて太郎に惡まれなど、天地の中に何國に住らん、賢き事を學ひたる者が、など是はどの事わいためぬぞといふ。豐雄實に買たる物にあらず、さる由緣有て人の得させしを、兄の見咎てかくの玉ふなり。父、何の譽ありてさる寶をど人のくれたるぞ、更にればつかなき事、只今所緣かたり出よと罵る。豐雄、此の事只今は面俯なり、人傳に申出侍らんといへど、親兄にいはぬ事を誰にかいふぞ

と聲あらゝなるを、太郎の嫁の川自傍にありて、此の事愚かなりとも聞侍らん、入せ給へと宥むるに、つひ立ていりぬ。

東塢鶴聲（つゞき）

朧　昔　生

謠ウタヒてふものは、幽靈の修羅の苦患をつげ、狸女の子を慕ふなど甚すさまじく恐しげなる事のみ作りたれども、作者の意、專ら面白き方のみを要として作りなせれど、文句は哀れに悲けれども、是を聞て涙を流せし人もなく、只面白く、花やかにのみ思ふめり。大よそ、言語の文句に拘はらざる、是を以て知るへし。鸎のホウホケ經と啼をきかんに、文句より感哀の發するものならず、無常をも觀念すべき、にさはなくして、遊山野遊の情を發す。こは外ならず。彼が調の春陽に發して、さへつることの面白ければなり。云々。

昔生云、歌の感は、文句の理より發せず。專らシラベより生すといふ意を、比喩せられしものなり。されど、其のシラベは、諸節のシラベにあらずして所謂性情の匂ひ、即ち嗟嘆の聲を指す。彼是な混同すへからず。

思オモヒ　オモヒの言はオホと云か本語にて、オモといふは音便也。されど、オモホエはオホヽエ也。二つのホをたゝみてオボエともいふ。さるは、ムスボホレ、をムスボレ、オホヽレをオボレといふ格にて、或は延べ、或は疊て云。皆其のかみの平言にして、オホ、オモ同言也。源氏、玉かづら、おはぬ方よりなん聞つけたる。など、いへるも。今ならば、思はぬ方より、と、云べし。譬ば、君のおはね世のおぼねなど、

いふも、君の思しめし 世の思ひいれ也。されど、おぼえなく、といふ語は、君のおぼえなく、世のおぼえなく、など云馳て、君に思はれず、世に思はれぬやうの事柄に云語なるを、今の平語に、心にしるしとめる事をのみおぼゆると云馴たるに耳なれて、さる覺はなし。など、云方に思ふは、俗意なり。

昔生云、今の俗意を以て、古の意を解くは、固よりあたらざること、此の説の如し。されど、猶おぼえといふ詞は、今つかふには、今の意にてつかふか、即時勢の沿革に從ふなり。此の外にも、古と今と、詞は同じくして、意味の轉化せしもの多けれど、古言は古言として、よく其の意を覺り。さて其の言を今用ふるには、今の意味にて用ふること、即言語の活動自然の情勢なり。

言靈　或人、自然の聲は天地の靈を含む 是、則言靈にて、所謂韻調也。といへるは、たがへり。外國といへども、何ぞ韻調なからん。こは人のみならず、異類を統ふる者也。別て皇國を言靈の幸ふ國といへるは、深き尊き意あるかな。抑々國は萬國に勝れて、水土清潔にして、生れ出る人の性情清淨也。且聲音清朗單直也、故に、諷ひ上る、則神明これを感應享受あること、是言靈の幸ふ妙用にして、外國の人の不正溷濁の聲音の能及ぶ所にあらず。萬葉十一に 言靈は八十のちまたに夕占とふ云々。又古事記に、天の御柱をめぐりて御殿まくはひし給ふ時に、告二其妹一曰、女人先レ言不レ良、雖レ然久美度邇興而、生二御子水蛭子一、此御子者入二葦船一流去。云々。

是、女神の先言ふさはしからず。言靈の幸なければ、其の生れ給ふ御子さへ不具にましまして、御子の數に入りたまはず、又天津日高日子番能邇々藝能命に、大山津見の神の女、木花左久夜毘賣と石長比賣とを奉りしに、姉石長比賣いと醜によりて、返し給ひしかば、大山津見神いたく耻て、申送り給ひける言は、我之女二並立奉由者、使二石長比賣一者、天神御子之命、雖二雪零風吹一、恒如レ石而常石堅石不動坐、亦使二木花佐久夜比賣一者、如二木花之榮一榮坐宇氣比弖貢進、此今返二石長比賣一而、獨二留木花佐久夜比賣一故、天神御子之命壽者、木花之阿摩比能微坐。故是以至二于今一天皇命等之御命不長也。云々。是石長と云御名に言靈の幸あるをしるべし。春の始に若水を汲み、齒固を祝ひ。若菜をつみ、松を引。又祝言に、鶴龜によせ、松竹によするも、皆言靈の幸を願ふ故也。

昔生云、言靈の妙用如レ此忽にすべからず。

今俗間に、緣喜といひて不吉の詞を忌み、又婚禮にも、所謂忌詞あるが如きは、則、太古の遺風にして、自然の人情ならん。あながち婦女子の言として笑ふべきにあらず。既に齋宮の忌詞、大嘗會の忌詞など思ふべきなり。

止孝録

赤堀又次郎寄贈

では、我が祖父の寫しおきたるものにて、久世子述之と記せり。久世子とは何人なるか今詳ならず。養子たらん人、まづ常におもふべきは、人間のなべにもてる子を不持まて、我を養ひて子とし、老の末

までのたのみとせらるゝなれば、何かにつけて心ぼそく思召すらんと、深く其心をおもひやりて、力を盡し仕まつるべき也。かくおもひても、なほ實心生せずんば、勤て成とも大切につかへ參らすべし。中庸にも、いはゆる、勉强而行レ之といへる、此の心なり。

養父母とむつましきよしを聞ては、實父母の心には、いかばかり喜くおもひ給ふべければ、養父母に能つかふまつるは、則、實父母に好く仕ふまつるなり。少も彼是のへだてなき理をよくよくおもひ明めて、差別のまよひをなす事なかれ。

父子在レ親。と、いひて、父子のあひだは、したしみむつましきをもつて宗とす。義理だてにて、かど〳〵しき時は、かならず不和の本となるなり。唯、別の事なく、親はへだてなく子をつかひ、子も又へだてなく親に仕ふまつりさへすれば、たとへ少々の事は、ともあれかくもあれ、全躰のすはりくるはざる故に、父子在レ親の道に不背。一日の間にさへ、雲あり、霧あり、雨あり、風あり、なんぞ晴天白日のみならむ。まして、月日を經る内には、父子の間とはいへども、順あり、逆あり。無理なる云ぶんや、又は道なきあてがひもある筈の事なり。唯それにとんぢやくせず、其の儘にて其の場に居れば、風雨の通り行くがごとく過行くものなり。

爲二人子一止二於孝一の理なれば、たとへ千萬の辛苦をなすとも、かならず別路に走る事なかれ。昔の孝子といへるを見れば、父母にしかられて居給ひしなり。吾人は、手前をよしとおもふ滿心ある故に、しかられてゐる事ならずして、我を立て、父母にさからひ、いふまじき事を云ひ、なすまじき事

をもなす也。古人も懇におしへられてゐる程目出度事はなしと諭し玉へり。此の事誠に意味深長なり。大舜の孝行を仰見れば、父母の道なきあてがひや、無理成云分を、我身に引請て、少もいとひ給はさるゆゑに、父かたくなに母ひすかしかりしも、終に其の心をやはらげ玉へり。父母のあてがひ道有に、孝行なるは、常の事なればいふに及ばず。

一養父母のあてかひ如何程道なき事ありとも、夫を實父母に告聞せて、腹だてさする事はゆめ〳〵有間敷事なり。夫を聞ては、こなたよりも又かど〳〵敷おもむけあるものなれば、終には少事も大事となりて、親子不和の基と成事、世上にまゝある事なり。されば、養子たる者は、實父母の元へ行ては、父母の喜び安堵可被成事を語り聞かせて、我か身の上の難儀なる事は、露ばかりも、父母の耳に入れぬやうにたしなむべき事養子道と云べし。

世間へ對して、已か一分を立てんか爲めに、父母にさからひそむくことを憚り恐れざるは、是皆迷心のいたす所にして、身を失ふの本なり。父母を非として、已がぶんを立んと欲するは、たとへば根を切て枝葉の榮ゑんことを求むるがごとし。

一不レ得ニ乎親ニ不レ可ニ以爲レ人。とは、先賢の敎誡なり。されば、人として孝行の志うすく、父母の心に不叶時は、人たる實を失へるなり。たとへ才智藝能他に勝れたりとも、すでに人たる事を得ずんば、なんぞ是を稱するにたらん。常々善き友に付合、惡しき友に交らざる時は、父母も心を安んずる者なり。總て子たる者は、父母の心を安んずるを以て主意とし、萬事を勤行時は、雖レ不レ中不レ遠矣。

一孝行といふは、雪の中に筍をほり、氷の上に魚を

求しがごとく、行ひがたき業を云ふにあらず。又我が智慮才覺にて拵る事にもあらず。唯、父母の心に任せ隨て、我を不立をいふなり。されど、父母の心を以て心とする時は、孝行なり。と、范氏の說にも侍る也。

一父母に仕ふまつる道は、形儀たけくして、おとなぶりたるを以て善にせず。唯、柔和にして、兒どもらしきを以て善とす。然る時は、親も、へだて、氣つかふ心なければ、自、何事もつかへ滯る事なかるべし。

人間の安樂は、親子の和順より大成はなし。苦患は、親子の不和に過たるはなし。樂を求め苦をいとふは、人情の常なれども、人皆苦樂の源を不レ辨ゆゑに、いたづらにたのしみを求むるとて、反て苦の海に沈む事を不レ知。なんぞ其の元にかへらざる。

一養父母の道なき事杯を、我に對して語る人あらば、是我常に親を恨みとがむる心有故に、定めて喜ぶべしと思はれてこそかくは我に語り聽するならんと、我身のあやまりをかへり見て、ふかくいましめ悟るべし。然に、我も同じく笑ひ興する輩は、いかなる心にやと、見る目も苦しくいと淺まし。

一養子に行人も、始より父母にさからひ、不孝をなさんとたくむ心は露もなく、ひたすらに父母の心に叶ひ、家内の和睦を願ふ而已なり。是人毎にそなはりたる孝心の自然なり。然共常の人の習にて、元來他人なれば、さまで我を大切に思ひは[illegible]まはじと、むかへ滯る迷ひ有によりて、染名の重なるにつけて、怨みとがめの心深くなりて、色々の淺ましき事をなすもの也。

是皆後來有染之迷也。學問之道無レ他、唯其本意を

失はざるのみ。

浮世いかた舟

作者不詳

こは、赤堀又次郎ぬしの寄贈せられたるにて、全ぬしの曾祖父のうつしおかれたるなりといふ。その浮世いかだ舟といふは、浮世はいかだぶねの如しといふ意にて名づけたるにや。世の人の行ふことゞもなにくれとあつめて、五冊ばかりのうつしぶみとなせり。いつ頃のものとも知らざれど、事によせて世をあざけりたるさまほのみゆ。蓋、作者は、深き意ありてならん。よむ人よきにはんじ給へかし。

浮世いかた舟

今はむかし、國風のうたに、いなものじや、こゝろはわれかものなれど、まゝにならぬは、たかきもいやしきも、をとこも、をんなも、おいたるもわかきも、みなうたひ侍る。おもふ事かなはねどこそうき世なれと云うたも侍り、よろづにつけてこゝろにかなはず、まゝにならねどこそうき世とはいふめれ。くつをへだてゝ跟をかくとかや、かゆきところに手のとゞかねごとく、あだるやうにしてゆきたらず。沈綿なものにて、我ながら、身も心もまゝにならで、いなものなり。まして、世の中の事ひとつもわが氣にかなふ事なし。されどこそ、いや世なれどいへど、いやその義理てはない世にすめど、なにはにつけてよしあしを見きく事みなおもしろく、一すんさきはやみなり、なんの絲瓜のかはは、おもひおきは腹のやまひ、たうざ〳〵にへらして、月雪花紅葉にうちむかひ、歌をうたひ酒をのみ、うきにうかいてなぐさみ、

手まへのすりきりも苦にならず、まつみいらぬ心だての、みつにながるゝへうたんのごとくなる、これを浮世と名づくるなり。と、いへるを、それしやはきいて、まことにそれ〳〵とかんじけり。

（二）浮世坊なりたちの事

今はむかし、うきよ坊とて、うきにういて瓢金なるはふし有けり。その俗性は、いとけなき時より、はなたれけれど、藤氏の末孫なりといふ。又おさなき時は、鼠まひこうぢかくれをして、人の家の軒のしたにおきふしせしかど、橘氏かと云人も有。又やゝもすれは、門わきにすみけるほどに、平氏の一族かともいふ。それにては有まじ、たゞまんぢうをすきけれど、源氏のながれなるべしと、とり〳〵に申けり、父はそんじやうそこにほうこうせし悴侍なりしが、百ぬらりのうそつき追從らしきへつらひものなりけれど、主君の氣にいりて、知行を得、出頭しけるほどに、余勢のいんしん物をとる事山のごとし。欲ふかくつみたくはへて、金銀そのほか、よろづにことかく物なし。たま〳〵いくさの塲にむかひけるとき、人なみに物のぐして、馬にかきのせられて出たれど、國中無双のおくびやう者にて、はやでしぬけても、しりになり、くらのまへ輪にしがみつき、うつぶしになりてみゐけるを、しらぬ人は、内甲をいられじと用心かとおもふ所に、鐵砲のつるめはなしに肝をけし、人よりさきににげかへり。かさねて、はうぜいにもまじはられず。町人になりて、日比とりたくはへたる金銀おほけれど、うとく人といはれてこもりゐたり。その間にむすこをまうけたり。此子生れて一七夜のうちより、よなきをすることはなはだし。むかし、大相國淸盛は、祇園女御のうみたる

處、刑部卿平忠盛か子也。實には、鳥羽院の御子と申、然るに、清盛夜啼をせしかは、忠盛かくとそうもんす。みかど、よなきすとたゝもりたてよ末の世に清くさかふる人となるべし。と、勅筆にあそむして給はりけるを、まもりにかけさせけれど、夜啼はとゞまりぬ。きよくさかふる人といへる歌によりて、清盛とは名づけし。是よりしてよなきする子には、此歌をかきて床にをけど、よなきのとゞまる、まじなひなりといふ人有けれど、さらぞとて、歌をかきて床にをきたれど、案のごとく夜啼はとゞまりけり。しかれ共、くさけふかき子なれど、かしらには、かぶとがさといふもの、鉢かづきのごとくになりて、目のきはまでたゞれしほどに、尼子佐竹のくたしをあたへて、ほどなくいえにけり。たゞ、かんのむし、かたかひのやまひ有とて、やせつかれたるを、赤蛙、八目鰻、いろ／＼わたへて養性いたしけれど、思ひの外にいもはしかかろ／＼といたしけり。風門すぢかひにきうをしたれど、鬼のごとくすくやかになれり。ゆく／＼は、わたり奉公、かちわかたうにもなさむやと思ひ、居合、やはら、兵法なんど、をさなきより手なれさせ。すこしは字かしらをもよみわくるやうにもあれかしと、寺にあげて手習をさすれども、げいのうのかたは、ことの外に不器用也。かくてとしをかさぬるほどに、親は身まかりぬ。是より身もちわがまゝになりて、あしをそらになし、小鳥をとし、魚をつりて、こゝかしこあそびさまよふうかれものとなりにけり。

(二)博奕の事

今は昔、博奕は、もろこしの烏曹と云者、博棊といふをまいだしゝより、金銀をかけものにして、勝負

を決す。陳思王、双六をつくり、十二棊を十二月とし、黒白卅の石を卅日にかたどれり。今はたゞさい二つを筒にもいれず、手にとりて　もみさいとかや名付、七つの数をかちとし、さいにあやつりをしわたし　人をぬきて金銀をとる事そのきとくは、まはふのごとし。又いつ比にか、南蠻より、かるたといへる物をわたし、一より十二にいたり、四くみになして勝負をけつす。今は、迦烏追重といふ事をして、人の前にまきわたす繪をこなたよりすゐしてしる事、通力あるがごとくなる。上手のたんれんあるもの、世にれはくなりけるほどに、是に出あひて、立あしめなくうちまけて、一夜のうちに乞食になる人多し。さるほどに、かのはなたれわこう、若子か此ごろややうく人となり、一手さきも見ねぬどびあがりめへうきれなりけれど、名をだに人なみにはつかで、瓢太郎とぞいひける。ぞくちうちのあふれものにつきあひて、もみざい重迦烏のたてもの錢の中に、銀をまじへ、銀の下に金をしきつゝ、たてゝはとられつゝみてはとられ、夜ごとによりあひてうつほどに、負る事かぎりなし、後にはしかりぞくちになり、けんくわ、まなこになりつゝ、赤面しける有さま、世に有人はすまじき事なり。見ぐるしさいふぞかりなし。

（三）博奕意見の事

今はむかし、へう太郎、ぞくちにほうけて、ものもくはず、うつらくと、ねもせず、ねきもせず、只われひとり心ぞらをたて、家にかへりては、あらぬ事をもくせつがましくいひのゝしるほどに、町の宿老來りて、いましめいさめらるゝやう、今は天下一統して、京も田舍も、ぞくちをうつ事を停止せらる。

夜を日につぎて工夫をこらし、うつべき手だてをあんずるほどに、座禪工夫をいたすならば、たち悟道の人となりて、六祖の惠能にかたをならべん。又ぞくちにうちかたんと、はかりごとをめぐらすを、軍法に替たらば、吳子、孫子をあざむき、末代の楠正成にもなりなん。されど、心をくだきて、晝夜に思ひわすれざる、そのつとめのれこたりなきを、學文にうつしとらば、朱子、程子のちゑにひとしく、德義名を世にのこさん。もし醫道藥療の法にうつさば、東垣、丹溪といふ共、いかてか是にまさらん。もみさいに目をこひ、重迦烏に繪を念ずる、是を念佛にうつすならば、生ながら光明かゞやき、みだのらいかうにあつかるべし。無用の事にせいをつくし、氣へらして、いたつらに月日をかさね。ひたすらぬす人の根元なり。たとひよろづのけいのうに達し、くらゐたかき人なりとも、ぞくちの座につらなる時は、たちまちにあなどられて、人にことぞをさげらるゝなり。德うすく、そこなひかろく、又さしもの武勇者も、ぞくちにはその心いやしく、みれんになるものなり。かつうは、公義の御れきて也。かつうはその身のためなれば、ひらにやめ玉へ。それさもなくば、町中としてとゞけ侍らんといへば、へう太郎聞ていふやう、湯玉のたつをいとはんよりは、もゆる薪をとゞむべし。ながれの水をせかんよりは、みなもとをふさぐべし。諸人のぞくちをいましめんよりは、さいつくる事をとゞめ、かるたをつくる事をきんせいし玉ふべし。又れなしく、ぞくちうつなといはんよりは、なるべきほどうつべし。負けたるものはそせうせよ、かちたるものをとりかへしてとらすべしと。かやうだに侍らば、かちてぜんなきぞ

くちなり、心をつくして何かせんと、ひとりぞくちはとゞまるべし。うちかちぬれど德あるゆゑ、かくしてうつも身すきならずやといへど、宿老大にはらをたて、、いはれさる世のおきめをもとかんより、まづわどのゝ身をたしなましませ、とじよくなる金銀にめをかけ、世のすてものなるぞくちをこのまんより、げいのうをならひ、商賈をさしませかし。これも意見が耳にいらずぞ、はひたきかたへはひ玉へといふて、とよみになりてかへられけり。

はきよせ

槇の屋主人

此の頃暇とるまゝに、彼處此處にて、目あたらしき者ども調べつるなかに、ふと、はきよせといへるものを見出したり。誰かしるしたきしものか知れざれど、余り古きものならず、文政の頃のものなり。はきよせの名にたがはで、くさ〴〵のこともあつむ。思ふに見聞につけて、胸にうかびたることゞも、筆にまかしてしるしたきたるものならん。こと〴〵くめでたきものならねど、なかにをかしきふしあり。こゝには、をしへぐさどもれ一つ二つを抄き出す。

對の物。紫の朱を奪ひ、鄭聲の雅樂を亂すは、君子の悪むところ、眞鍮と黄金は似た物なれど、正躰の貴賤格別なり。是に等しく、人の行狀善と不善は、紛るゝもの甚多し、能く見分けてまどふことなかれと、清少納言が筆精に習ふて、あら〴〵たとうるも鵜にまぎれて烏といはんか。

律義など、　愚かなど。

器量あると、　横着と。

高等なと、文盲なと。
風雅人と、僭勢ものと。
詞すくなきと、不挨拶と。
事知と、出過ものと。
和かなと、自墮落と。
堅きものと、偏屈なと。
慇懃なと、諂ひものと。
諂ひなきと、氣儘なと。
實病と、不養生と。
世話やきと、物に掛りと。
信心者と、愚痴なと。
悟つたと、滅法者と。
氣丈なと、無分別なと。
をさまつたのと、ぬるいのと。
儀式なと、奢者と。

儉約なと、勝手ずくと。
さとい人と、早合點すると。
丁寧なと、くどきと。
愼深いと、らち明かぬと。
功者なと、なまめくと。
高上な人と、そけ者と。
隱居と、鼠根性と。
博識なと、うそつきと。
忠の深いと、名聞くらしと。
發明なと、猿利根と。
用心深いと、臆病なと。
質朴なと、嗇きと。
大氣なと、積りなしと。
道德と、我儘なと。
金持と、山こかしと。

賢しき人と、　追從ものと。

一、論語よみの論語しらず。世のなま功者になりたるか、又なめるのか、大氣なか、氣のつかぬか少しむかりの書をみれむ、いつはり高ぶり、何の役にも立たぬ唐書よ、山水よ、南京の、唐やうの、何の角のと、事もしらずしてしりかはなるは、古風の捨りて歎はしきことならずや。古實は元より、先祖の功もうせ、系圖もなくなり、當坐のがれの上氣もの多くして、世間をのみ繕ひ、寫し本をするかはして、人にみせたり語りたりするのみにて、われ寫しながら、何が書きてあるやら更にしらず。經書はよめとも其の心をしらず、又知りても行ひ學ぶ心更になし。一文字尋ねられて、本讀迷惑なり。是皆論語よみの論語しらずなるべし。

一、法禮の事。世の遷り變るにつれて、次第に、祭禮婚禮の薄くなるは、いとも〳〵なげかはしき事ならずや。人皆神の御末なれむ、先祖をまつらずしてよしといはんや。おのづから我日本の正しき法のきえぬるこそ、かなしみに絶えたり。

一、滅多に人を譽めぬ事。肥後の國に若き女一人ありて、兩親へ甚孝深くして、國主より褒賞多くもらひし也。然るを、ある學者甚だ感賞して、孝子傳と云書を作りて世に廣めけり。其後彼女不義の擧動ありて、此地を走れり。學者聞て書を破りて怒りしとぞ。

一、異國を。大唐、大明、或は中華などいふ人多し。これらはひとへに、我皇大御國をもろこしの管國にしたる言葉なり。かけても言ふまじき事ぞかし。

一、御國の御恩をかへせ。凡て今の人は、健やかにありながら、何ののぞみもなく、隱居を早くする

と、心得がたき事なり、力のあらんかぎりは、御恩を報ずべし。治世には命は奉りかたきをや。

一、忠孝。人並に生れたらんと思はゞ、第一忠孝にれてたるべからず。

一、まあたしか。と、いふやうなる曖昧なることはまづいふべからず。

一、是非がない。と、いふて行なりにするもあしき事なり。

東京二十四景　（二十二）

蓬屋女史

十二社

皇城の西北、新宿の町はづれ、丘あり、池ありて、市街の塵をはなれていときよけなる處に、かたそぎ、からぐ〜しき御社、熊野の十二社をうつしたるその十二社をなまりて、十二社と云ひて、ふるくより名所の一となれり。池の長さは四五町、幅は一町ばかりあるべし。両方は小山にして、ふりたる松の姿など、えも云はず、はては葦など生ひ茂り、ながめいと好し、やしろは丘の上にあり。木立物ふりたり。その側を小川音高く流る。やしろの側へ池へかけて、



茶亭たちつゞきたり。床の下は池にして、いと大なる緋鯉、いくつとなく喰喁するさま、いとたのしげなり。この地花はなし。春は、こゝより六七丁へだたれる處に銀世界とて、名たゝる梅園あり。そのかへるさ、こゝに小憩するもよかるべし。夏は涼を取らんとて、都人多くつどへり。茶亭の後の岸に、瀧二つあり。之に打たすれば、浮世の塵も、垢も、忽ち洗ひさられて、夏ともおもはれず、瀧より出でゝ、茶亭に憩ひ、欄によりて眺むとすれば、風水面を吹いて、銀鱗碧水の中に潑剌たり。かたへには、鞦韆ありて、小供の運動にそなへ、池には小供うちむれて泳ぐなど、いとにぎはし。酒食は茶亭にて辨ずべく、夏の日涼を取らむは、こゝに若く處なし。たゞ雜沓にすぐるは、うるさし。かどづけ來りて、高らかに三味線をひき、阿房陀羅の小僧、いくたりとなく、いれかはり〳〵來りて、木魚たゝきて、聲高くかたるなど、こゝも浮世の心地して、殘り惜しくも萬斛の涼味袖につゝみて、うすべく、夕日をせなに、塵ふかき都に入れど、さすがにまた戀しかるべき都の外の名所なり。

水産王（續）

石樽青苔

ある時は櫓をもこぎ、ある時は魚をもつくり、油なとり骨を去り、大かた海人少女ともなりはてたるいさ子は、つげの小櫛さすひまををしみ、身だしなみの衣服も汚るれどとて、玉の肌を傷ふばかりなる麁妙の衣を巾せまき帶にてとめ、かひ〳〵しく立はたらくさま、これにても阿孃様とよばれ、女書生となり、奥様といはれし方かと疑はるゝ斗なり。こを

きけるたか子はいたく驚き、いかに夫の留守なれどとて、女にはあるまじき仕わざ、いで友達のよしみ、親戚のちなみ、よそに見てある事かはと筆とりてさらく\/と書認め、郵便にておくり來れる文、ひらき見れど、

妾が親愛なる磯野の君よ、時はまさに秋立ちて、單の衣や、輕やかにおぼゆるを、君にはいかにかおはすらむ、おもふに事なくてこそ。夫の君もいよ\/旅順口へ御乘船のよし、國のためいとも\/よろこばしき事。まこと暇あらで御子樣をも拜し度、且又御身の事につきて聞込みし事も侍れど、一度御對面たまはりてとねんじては侍れど、いまだ其折を得ず、口をしく候。抑々女の女らしからぬ斗、世に困うじ入るは侍らず、きけば此頃御許樣には水產のことにかゝづらひ給ひ、無智無學なる賤女と伍をなし、朝に魚介の友となり夕に櫓櫂の主となるなどきゝ候へど、或は僞言と信じ候はず、されどもし誠ならば憤惋に堪へ侍らず、世に不幸なるもの多く生活にたはれてせんかたなく、いやしきわざする女もあれど、御身の如きはたゞ夫の君の戰爭に出られたるのみ、あとには僕もあり、婢もあり、金米は倉廩に充てりときくに、何を苦しみてさる賤しきわざはし給ふ、女らしからぬにも程こそあれとれもあれ候。まして御身は女學校中屈指の方にもあり、後來女子敎育の上にいかばかりの功績をなさむ、女權擴張上まことに神より賜へる好人物と、われ人ともに樂み望み居候ひしに、はからずも自ら求めて無敎育者の眞似をなし、女子に賦與せられたる權利をすてむとせらるゝこと、何のことも、辨へられず、學校の不

名譽、友人の名折、これには過ぎじと歎かはしく候。仰願くはわが苦言を容れ、速かに正道に立歸られむことを、まことに思ふまゝを打出してきこえ候も、親密の間柄余義なき事にて、御身を思ふ切なる心の然らしむる所と、御怒りなきやうねんじ上候。かしこ。

月　日　　　　高　子

磯野いさ子さま

とあるに、讀返し〳〵て不禮しき書ざまをも腹立しとは思はず、幾百の仝窓中かゝること憚らずいひおこすは他にはあらじと、夜ふけてやをら机にむかひ、

御かへしまでに文してきこえまつる、御心にかけられこまご〳〵との御言の葉、何れも〳〵御尤ともの理ともうれしさなどきこえむも中々にてそ。わが身こそ誠に不幸なる家に生れ、女にして女には似合はしからぬわざをつとめ候ふも、浮世の常さきの世の定めかとあきらめ、たゞ家に傳はる職業を大切におもふ心よりに候、殊に夫は今馬を追ひ牛をかりて人夫にもおとるわざを、我國ならばまだしもの事、しらぬ野山の露にふし雪をかみて、御國のためいそしまるゝときくを、家に殘りて、よければよしと安らかに着、安らかに食べ候ふこと、神様にも佛様にも空恐しき心地して、せめて夫のなし初め給へる事を、かけず、みださず、うけつぎ度ものとおもひ、いさゝかばかり身をつかひ候ふ事に候、よしや漁夫の子になり下り候ふとも、夫の苦勞の千々の一にはよも及ばじと猶絶えず思苦しみ居候ふ。取締るべき夫もゐず、又わが子一人の教育もおぼつかなしと憂ひゐるふつゝかなる我

身の、いかで世の教育なぞの如きれふけなきわざにはつかるべき、まして女權とやらに喙を容るゝなど、思ひもよらぬことにれはしまし候ふ、學校の名にもかゝり候ふことゝ、誠に〳〵すまぬことには候へど、これとてせむかたなきめぐり合せに候へむ、教師方の御心にふさはしからずと思召さむ、わが名をのぞきたまはむとも、わが世々の務よそに見ることはなりかね候ふ、家業のためにこそ學問もせめ、學問のために家業をすつる事はいかゞとれもはれ候ふ、つまりは我身をあまりにふかく思ひ玉ひ望をかけたまふより、くさ〳〵の御氣にめさぬことも出來る事かと思はれ候ふ、足はぬ考にはわが國のやうに盡くる期なき財産の、波の上にまろびをるをもて考見れど、とかく志すところは海のこと〳〵といつも思ひをり候ふ。いかで〳〵我身はもとの我身にも候はねど、たゞ東海の海人少女と思しかぎり給はんこと、くれ〳〵も願はしく候ふ、御心にそむき候ふ事はまことに本意ならぬことにはれはし候へど、我身にはこれがふさはしきことにて、いや〳〵するにてはなく、好みてする事にて、樂極りなきことゝ思召やり下されたく、よろづは又きこえあくべく候ふ。

猶々伯父上伯母上へもよろしく御傳へ願上候ふ。

月　日　　かしこ

いさ子

高子の君のみもとへ

とかきをへて、大きなる歎息してありけるに泣出す乳兒の聲に、急ぎ添乳にとて打臥しぬ。

地は一面の銀世界、よらむには巖石はゆるが如く、退かむには怒濤はげしく、又くれくりゆきたる糧食を

いかにせむ、まゝよ、くだけむくだけむまでも進みよりて、第一に巖によりつき、雪のなだれ今やおちかゝらむとするこなたに、馬をひきて進み入るは輜重兵

男なり、こゝ榮城灣の間道、前に敵あり味方あり、ためらへむ敵にとらはれざらむには、味方の糧つきぬべし、こゝわれ等がはたらきどころといよ〳〵ゆき〳〵て、かなたの灣のかたへ入らむとするに橋はあらず、せむかたなくて氷とぢたる川の上を踏ゆけど、いかにしけむ氷はくだけて影はうづもれぬ、殘れる馬の嘶のみ高くきこゆるに、千仭の崖の上よりさくなだりにおちかゝれる雪は、見る〳〵あたりをおほひて小山をなしぬ。船に見てありし妻は「われ助けてよ、われわが夫を、」と呼べと叫べと、一人のために大切の職務をよそに見るべきにあらずと、やがて工兵の如きが來て打橋わたし、みな無事にわたり過ぎぬるに、見てありし妻はあるにもあられず、「危うけれど波の少しをさまるをまて、」と船人のいふをもきかず、おどりてねむとして、わが身波におちいりぬと見て、ふと目さめたれど、こは轉寐の夢にして、危うし〳〵叫ぶ船人の聲はなほ耳に殘れり。

「おまりうなされたまふ故今おこしまゐらせむと思ひ侍りし所にて、」といふは正しくお正なり、さては夢なりしか、夢にてあれよかしと心はおちゐたりしものから、冷やかなる汗は身をひたし、胸の動悸なほやむべくもあらず。

黑雲とぢ蔽ひてそこともわかぬ沖合に、救ひをもとむる聲、風のはこびか手にとるが如し、すは事こそ起りたれど、磯野魚類製造場の工女は、一人いで二人出で、難船々々とをらび出るに、男兒はみな遠く漁獵にものして未だ歸らず、全村みな女なれど救ひ

ぜらせむすべなし。さりとて見す〳〵かの船を奈落の底に沈め、數多の人の命を鰐鮫の腹に葬らむは堪へぬところと「誰かある吾とおもはむものはつゞけ、情は人の爲かは、」とはやいさ子は岸邊にかけいでゝ、非常に備へたる救助船をおろさむとするに、れ正は追縋かりて「奥樣待ちたまへ、小女等にて引受けまゐらせむ、」といへどきかず、たゆたへどあやまちなむと早船こぎ出さむとする内、工女も來合ひて「いざ人は足りぬ、」といふ間もなく、なさけの一念は天にもとゞく大濤、うつが如き暴風も遮るべきにあらず、見る間に擢の拍子そろへて、遠き波間にきおうするに、岸なる人々はたゞ呆れに呆れて打まもりをり。

「高子さま御氣がお付なされしか、まづ〳〵安心し侍れ、」とわが子の如くわが親の如く看護するは、思ひきやわが訪はむと思ひ來しいさ子ならむとは、さてもなほ物もおぼえず、あたりに打仆れ居る同乘者を見やり、漸くにして、まことわれは鹽竈の沖にて難船したりしなりけりと思ひわり、いさ子のいふをきゝて、まづ第一にはが忠告を容れず、女らしくもなく、水手楫取のまねをし、魚介をつくるなどのいやしきわざをとゞめて、一層學問につとめしめむと勢こみて、遠き里まで出來し事も忘れてか、只一言の詞もなく、頰に傳ふ涕はおちて、枕の上に靜に聲あるをきくのみ。

後幾月磯野家には屍骸なき棺を出して、世々の菩提所に野邊のおくりす、しかも喪主なる淸はいまだ乳をはなれず、ふさやかに匂ひふかき髮を、あたらしくもきりおろしたるわかき尼の懐に抱かれて、折々に打しめるさま、送れる人々の袂をしはらしめぬ。

しかも清の海における名はいよ〳〵あがりて、其盛ねいたむかたなく、おのつから博し得たり水產王の名。

（をはり）

朴平（廿）

白魚女史

天保でも、八文でも、勿體なくも、大殿よりしこまれて、きたへにきたへし朴平が魂魄は、まがりも、折れも、朽ちも致しませぬ。我が君ならぞともあれ、大殿より必ず居つけと仰せつけられし君を、朴平如何に不甲斐なきものとて、人の家の食客、人の家の留守番などに致し奉らるべき、御歸り之なくぞ、朴平も此處をぞ動きませぬ、起ちませぬとて、こぶしを握り、つめよりつめよるに、朴平どの、さながたくなに責め給ひそなど、口に愛嬌をとばして、茶を汲み來りて、おつゐの慰めんとするに、何を、用らぬ言、さし出でらるゝな。元來おぬしは誰がゆるしを受けて主君のお留守に、みだりに、人を留めらるゝぞ。けしからぬ、物足らぬにも程こそあれと、下女にまでやつあたりの小言するときに、彼方はさむけたるものとて、氣にもとめず、なほは、笑みて、何をか云はんとせしが、朴平の眼の色を見て、にはかにまじめに、口をさへつぐめたり。

文雄もうるさく、だまれ、きかぬとのみ云ひ居りしが、何をか思ひけん。ふと帽子とり上げて立ち上りしに、朴平あわてゝ袖をとらへ、何處へは行き給ふ若殿、さても〳〵、此の朴平を何處まで泣かせ給ふとて、堪へず淚をはら〳〵とふり注ぐに。氣違ひ、狂ふな、家ぞかりには歸りてつかはす。汚きもの傍へなれしぞそ。心を靜めて、歸るなり、居るなり、起

つなり、そちも用意せよとの文雄の言葉に、いさゝかなりとも己の意見を聞かれたるかと、朴平は、いたくよろこび、ふしをがみ、ふし拜み、さては歸り給ふか、難有や、かたじけなや、これで、朴平が命、三歳はのびぬとて、いそ〳〵と立ち上り、駒下駄を、杖をと見つけてとり出で、己がのり來りし車に強ひてのせ、下女にも云ひ過ぎし事などわびて、己れもまた車やとひ、ともに家にかへれど、家にもまちこがれたる百代、よろこびて迎ふるを、文雄袖たははんむかりにして通りぬけ、誰れも此處へくるなとて、書齋の障子ひしとさせしより、十日むかり出でもせず、朴平が三度の食事をはこびて、何をか云はんとすれど、何も云ふな、云ひてくれるな、うるさき事云はんとならむ、食事もせぬなど聞くよりわなゝきかへる朴平、たゞ涙にむせぶのみ、また物も云はず、いつ如何にして、若殿の心をやはらげんとくるしき中にも、なほつゝまんとする百代の手前、梅見に行かれて、あまりにすかぬ御酒めされ玉ひし上、汽車などにていたくもまれ給ひし故か、腦の少しわづらはしとの事にて、人をもいとひ給へるなり。介胞し奉るほどの病氣にもたはさず、たゞひとりこもり給へど、その內には御心もはれ給はん。何も〳〵、れ國元にましますとおぼして、聞かぬ事、知らぬ事とればし過ぐさせ給へ、やがて、おのづからに御心もとけ給はんと、なほつくろふ朴平の胸は、如何にくるしからむ。

文雄、書齋にひきこもりてより、流石は好みし道、書をもまたよくよめど、されどむかしの如くよまねんなくよむのみにあらず、折り〳〵は何となく想ひにしづみて、ともすれど舌うちならし、頭など叩く音高





し。

百代は此の頃ははか〴〵しう食事もせず、ひきこもりて心地何となくすぐれず、脳のわづらはしげに、身体さへ何處となく細り行くに、朴平おどろき、強ひて醫師迎へて、容體とへど、心配より出し病氣ならん。何にても心はらさするが、百藥にもまさらんと云ふに朴平は一入のうれひ、氣も心も遠くならんばかりに、已れも泣きたきばかりなるを、かく心弱くてはと、自ら氣をはげましたてゝ、文雄の書齋へ先きだつ涙をかきむしりて、百代樣が御病氣、思ひわまらせ給ふあまりにと、むせび入る言葉に、文雄は舌うちならして、さらば、にはとてても、飲ませなぞなはらんとばかり云ひて、つと立ち上り、そのまゝ何處へか出で行くに、朴平はあきれて言葉も出でず、せんすべなげに、そのうしろかげを見送りける

が、つと椽に立ち出で、はや二三日がほどには咲き出でんと思はるる一重櫻の大きなる枝、二つ三つ折りとりて、百代の部屋をおとづれけるに、彼方はうちおどろきて、いつもながられしぬぐふ涙いぢらしく、やゝはちまきをはづす手のおくれたるもあはれなり。朴平もちたる花も、忘れんばかりの氣違ひ、いたうたつむりのなやみ玉ひてかと云へど、くるしき中にも、少しはゝ笑みて、いなとよ、さばかりにはあらねど、一寸かりそめに結びてしに、いと心よかりけれど、とりつくろふほどいやくるしき心のわづらひを、なほも見せじとて、いたくめでたき枝ぶりやとほめかくれど、朴平もうち笑ひて、枝ぶりは如何に候か、御手ぶりの程見奉らまほしさに、折りては候ひぬ。しばしの御心やりにさし玉ひてと前におけど、櫻ばかりはつくらぬがよきもの、そちの

心の一すぢにと、れしかへすもよく〳〵のわづらひ――とおはれなり。

文林



山家落花　德大寺實則

静かなるわがやまかけにさく花も
よのあらしをものかれさりけり

河蛙　近衛忠熈

早瀬がは小石ながるゝみつの上に
こゑみたれても鳴かはづかな

水上落花　佐々木高行

足ひきのかた山さくらしつの女か
みつ汲をけにちりかゝりけり

春朝　鍋島直大

うぐひすのこゑはすれども心ちよき
あしたの床はれきうかりけり

霞添山色　高崎正風

朝かすみたなびき初てふしのねの
雪にもみゆるはるのいろかな

水邊山吹　交野時萬

枝たわに咲なひきたるやまぶきの
かげてそうつれ庭のいけみづ

山家梅　長谷信成

春かせもまだ寒けれどやまさとの
かきねの梅はとふひともなし

花間鶯　宮地厳夫

朝日かげ匂ふさくらのはなの枝に
なくうぐひすの聲ののどけさ

故郷藤　小出粲

まつはかり殘るとされもひし故郷は
ふちのさかりに成にけるかな

花林朧月　仝

ちる花は木のもと白くみえなから
林をくらきはるのよのつき

霞中花　遠山英一

ときは木は霞みはてたる夕ぐれに
はなのみしるくみゆるとほ山

春思　北郷久政

野に山にこゝろうかれて時の間も
はなに思ひのたえぬいろかな

河上春月　鎌田正夫

さくら花ちりてながるゝ河みづを
朧つき夜にわたりけるかな

春舟　内藤存守

風なきてかすめる海をゆくふねの
ははわげながら動くともなし

花の歌讀める内　諏訪忠元

見花

吹風もなきてしつけきはるの日に
心もちらてはなをみるかな

朝花

あさいする人かるらんこの頃は

花にこゝろのたれもひかれて

月前花

春のひの長きにあかて咲くはなを
はのかにけぶる青やぎのいと

海邊春月

さくら鯛つりしいそへも暮そめて
ふたゝひみつるゆふづきよ哉

花便

春雨のはれしにつけてやまさとの
花のたよりそいやまたれける

池邊花

白雲のかけかとみしはいけみずに
庭のさくらのうつるなりけり

海邊花

鹽やくあまの少女もからき世を
わすれて磯のはなやみるらん

殘春　　師岡正胤

花ちりしのちのやまを見ぬ人や
秋をさびしといひそめにけむ

春野　　三輪義方

とぶ蝶のそでみねろめし朝より
ものなつかしく野はなりに鳧

野早蕨　　仝

はなといふ花さく森にはならで
そらまはしきは野への早蕨

右大將頼朝　　菊池眞澄

富士の根の裾野の狩にしゝならぬ
人の心も君は獲にけん

遠村柳　　鍋島榮子

雨はれし野末のさとのかきねかも

はのかにけぶる青やぎのいと

海邊春月　柳原愛子

かり衣ひとしくそめてかきつばた
波間ににほふはるの夜のつき

花宴　小池道子

さくら鯛つりしいそへも暮そめて
花のうたげにふかしつるかな

蛙　保科節子

春たけて花ものこらぬ小やま田に
ところ得かほになくかはつ哉

霞添山色　日野西廣子

若菜つむ野は寒けれどうちわたす
やまはのどかにかすむ春かな

野外雉　税所敦子

きしの聲とほさかりけり春の野の
すみれつむ子やれとろかし劒

杉影映水　遠山いね子

萬代のいくらこもれるいけならん
小松れいまつ影をうつして

田家垂柳　諏訪晴子

芹わらふ賤かもすそもはらふまで
田川のやなぎいとたれにけり

春雨　仝

青柳のいとによりても見えにける
ふるともわかぬ庭のはるさめ

雨後花　北島以登子

春雨のつゆものこれる花の上を
さやかにてらす夕日かげかな

のどかなる日濱邊にいつ　原田蒼生子

磯さきのまつのこかげにさくら貝

ひろふわかみも打かすむらん

春朝　岩崎華子

菜の花に朝日のかけはさしながら
いまたねぶれる蝶もありけり

呼子鳥　鶴久子

奥ふかきやまのさくらを獨見て
かへるうしろによふこどり鳴

春雨晴　中島歌子

雨ながらくるゝと思ひし花の色の
おぼろに見えて月は出にけり

臥龍松　安東菊子

雲をおこすちから潛めてふす龍の
すかたに似たるまつはこの松

青柳隨風　仝

なびくとは見ゆる物から糸やなき

受けて風をはらふなりけり

社頭落花　淵上喜子

散りてゆくはなをとゝめよ大宮の
神のはふりこ風まつりして

月あかき夜隅田川のほとりに花を見て　內田遊歌子

みつの面花のこすゑも照りそひて
月もてよひそさかりなりける

旅の庵にてあるゆふへ　柴田靜榮子

ふる里の庭なつかしきゆくへかな
かりのいほりにかをる梅が香

藤　師岡須賀子

紫のくも下り居るとみえつるは
ふぢさく園のよそめなりけり

花有遲速　仝

いざゝらばみやまの櫻たつねみむ
　みやこのはなは影たにもなし

上野の花を見て

田邊わけ子

うら〳〵と霞わたりて、吹風ものどかに匂へど、いづこも花のさかりならむと、しばしいとまをゑて、車いそがせたるに、下谷わたりの、まがね道馬くるまにのりたる人、花見に行なめり。老たる若き、いと所せうゐてみて、引こまもくるしげに見ゆ。

　のる人のこゝろは空にうかれても
　　こまはたゆげに引ぞわづらふ

花さけば、鳥も時を得顔に、木づたひてうたひ暮すを、同じ世に生れあひたる此駒よ。春はたゞ、はな見車を、朝まだきより、夜ふくるまで、足もそこなふばかり、いく度か引かまうらむ。あなあはれ、かく

てたてなむこそ、かなしからめ、などおもひつゝ上の、岡にいたれど、花の梢は、

　さくもありさかぬもありて立ならぶ
　　まつにはゐたる花のいろかな

ちりかたならむよりは、中〳〵に見どころあり。

　さとはあれどさくらはあれど大み代の
　　みやこのはるにゝるものぞなき

そこはかとなく歩みつゝ、見渡すかぎり、花の梢のつゞきたる、又たとしへなし。

　むさしのゝ都となれる大み代は
　　ゆけどもはるのはてなかりけり

こなたかなたの木のもとに。さじきめくものれきはたし、いろ〳〵の菓物などまうけつゝ、いこはせ給へと打まねく、少女が袖も花にもてはやされて、いとをかし。

木のめにて人まち顔のをとめらも
　かぜふかぬ間のあるしなるらむ

夕ぐれのけしき見すてがたうて、宿やからなむとおもへど、車ひくをのこ、いざとていそがしたけれど、かへり見がちにうちのりぬ。

青柳の詞

佐藤紫光

野邊、山邊、ところ〲に、梢は花の姿をきそひ、草は色のうつくしきを爭ふ。この春の天地に生れいでゝ、獨さわらぬさましたる美人ありけり。うるはしき姿は、花をよそほはねど清らかに、清らかなる色は、なか〲に、飾れるよりめでたし。遠く、霞のひまゆりて、姿のうちけぶれる、近く、花の姿にまじりて、ひとり優にけだかき、いづれか、人の心をなやまさゞる。春の光は、のどやかにこのたをやめの身を照し、花にかすむ月影は、にほひやかにこのらうたき姿にたちそふ。されど、晝は、ふかく霞のとばりを希ひて、只花の香のたぐふを許し、夜は、なごやかなるしとねにねむりて、只胡蝶の夢をれひ、いさゝかも、世に姿をほこりてときめかむとの心あらず。百鳥はゆかしき音色をきほひて、媚を求むれど、いづ方にも心をよせず。風はさま〲に催せど、しなやかになびくやうにてなか〲に手折らるべきにあらず。なよゝかなる女しき心しらひは、露も失はで、艶にうきたる方のすき〲しさは、又夢にもなき、その心の奥ぞゆかしきかぎりなる。流るゝ水は、ことさらに流をよどめて、このたをやめの鏡となりて、美はしき影をやどさむをのぞみ、春風は、殊更になごやかにふきて、このたをやめの雲のびんづらくしけづりて、清らなる姿にたづさは

らむをねがへり。げに、よろづ花やかにけや〱しくのみある春の天地に、たゞ、かざらぬ清き姿に、幾そたくのすき人の心をかうでかすらむ。あな、心にくしや。

春雨のはれたるあした、窓にしやりてながめいだせば、庭の青柳、いとにはひやかにしだりて、露をれびたるすみつき、洗ひいだせる色合なぞ、まことや、美人浴後の姿ればゆるぞかし。

落花をとぶらふ辞

勝家貞文

和なる春風、よく花を開かせ、温なる春雨、よく花を養ふ。温なるその春雨、またよく花を破り、和なる春風、又よく花を亂す。風のこゝろ、花を開かしむるにあるか、はた花を亂すにあるか。雨の意、花を養ふにあるか、はた花を破るにあるか。爛熳たる花の色はもと雨の仁なり。馥郁たる花の香は風の恵なり。この風、即ちその色を亂し、この雨、即ちその香を失はしむ。その香を失はしむるは雨なり。その色を亂さしむるは風なり。春風のこゝろ、眞に花を開かするにあり。花を亂すにあり。春雨のこゝろ、眞に花を養ふにあり。花を破るにあり。春風、春雨、いかでか情なからむ。花は亂れぬ。亂れたりといへども誰か色なしといはむ。花は破れぬ。破れたりとこそいへ誰か香なしといはむ。あはれ、花よ、よく時を得て咲き、節に従ひて散る。色は天下に匂ひ、香は四海に薫る。散るも恨むなかれ。亂るゝもはたかこつなかれ。嗚呼。





雜報

●おほみめぐみ　去月廿三日、八王子に大火ありて五千二百有餘戸を烏有に歸し、罹災民一同艱難の趣、忝けなくも　聖聞に達し、　天皇　皇后　兩　陛下より金四千圓を下して賑はし給へり。今更に申し奉るも愚なれど、天災あることに、大御心をかけさせられ、みめぐみをたれ給ふこと、寔に感泣に堪へざるなり。

●大喪使の廢止　御百日祭もいよ〳〵濟せられたるにより、去月廿一日、京都の御所に、大喪使長官、事務官、齋主、齋官一同を召されて、その職を解かれ慰勞金を御下賜あらせられたりと承たまはる。

●皇太后宮職の廢止　去月卅日を以て、皇太后宮職を廢せらるゝ旨仰出されたり。

●英國皇室の御慶事　英國皇孫ヨーク公妃殿下はめでたく女子御分娩ありしよしを聞く。よろこばしきことなり。

●國々の花たとへ　我が國民が君を尊み國を重んずる心は、異國の人にまさりて、いとも〳〵深く、厚きは、今更のごとくいふまでもなけれど、これぞ、大和心と稱へて、そのいさぎよきを櫻花にたとへたる宣長翁の歌こそよくあたれることにて、他にたぐひなきを、めでもし、ほこりもするは、吾も人もう

れしき事の限りなり。かゝるめでたき我が國には似つくべくもあらねど、それ〴〵國々に準してそれ相應に、其の國なべての人心をもあらはし得べき花のありてか、近き頃の「ジヨルナル、ヲブ、エデユケーシヨン」といへる雜誌に、國々花たとへとしてつぎの如く載せたり。

佛蘭西は　胡蝶花
雅典は　菫菜
愛蘭土は　白苜蓿
加奈多は　砂糖楓
普魯西は　菩提樹
索遜尼は　香美花草
英蘭土は　薔薇
埃及は　蓮
西班牙は　石榴
伊太利は　百合
獨逸は　玉黍
威爾斯は　韮
蘇格蘭土は　薊

右なか〳〵それもしろし。尙、支那なる罌粟、朝鮮を朝顔にたとへんもをかし。

●女子高等師範學校の保姆練習科生募集　女子高等師範學校にて今般保姆練習科生徒二十名を募集するにつき、志望者は、來る六月二十日限り、同校に願出づへしとのことなり。而して、入學志願者の資格は、修業年限六箇年の高等女學校卒業、若くは、之と同等以上の教育を受けたる者にして、年齡十七年以上三十年未滿の者、入學試驗は、七月一日より全三日までにして、試驗科目は、躰格、國語、算術、歷史、理科、音樂、圖畫なり。但修業年限六ケ年の

公立高等女學校を卒業せる者、及尋常師範學校第二學年の課程を修了せる者は、躰格、圖書、音樂の外試驗を行はさる由なり。且、又、生徒の學資は、自辨にて、通學なるも、授業料を徴せす、書籍器械の如きは成るべく同校に於て貸與するとのことなり。

●盲啞學校啞女の謝辭　小石川なる東京盲啞學校は、世にも憐れなる盲啞生を教育して、年々數十名づゝの卒業生を出し來りしが、今年は、第九回目に當りて、卒業生は盲十一人啞十八人なりと。證書授與式は、去る月十七日に行ひて、その席には、文部大臣蜂須賀侯爵も臨まれ、演説をもせられたり。さて證書を授與し畢りて、生徒の謝辭ありしが、その内に、啞女須賀ふみとて、今年十六歳なるが廻らぬ舌に覺束なくも述べたる言葉は、最も憐れにして、場に在るものゝみそゝろにかなしみを催はし、中にも一入文部大臣は、えたへず、顔をうむけて涙をぬぐひたりとなん。

このふみ女は、東京にて某の女なるが、三歳の時馬痺風の爲に啞となり。此度尋常圖書、裁縫科を卒業したるものにて、當日の謝辭は左の如し。

私入學以來數年の久しき校長始め先生方の御懇ろなる御教育を頂きれ蔭を以て今日文部大臣閣下御來臨の席に於て卒業の證書を授けられ私の嬉しさは素より母の悦びは限りなきことに存じます私は三歳の時六歳の姉と共に父に別れ兩人僅かに母の手にて養はれましたが不幸にして姉妹共に啞となり世に厄介者と侮らるゝ筈でありますのを大御世の深き恵みと先生方の御恩とに依り先きには姉常子卒業となり今日又私が卒業を得て尋常の人と交際ふことの出來る様になりました此の有難さ

を思ひますれば思はず涙が溢れます玆に謹て御禮を申上ます。

●女子の就學に就て

〇女子の不就學及び半途退學多き原因

一、舊來の陋習より父兄が女子敎育を無用視すること

二、子守其他日常家庭の用事を補助することゝ女子は男子より多きにより女子を驅て之に從事せしむること

三、女子は敎育を施さゞるも敢て支障なしとの誤解をなし居ること

四、母自身が無敎育なるが爲め其子にも左程敎育を施すに及ばずとの感想を抱き居る事

五、實際貧窮の爲め女子を就學せしめ能はざる事

六、現時敎育の方針は主として男子にのみ都合好きも女子には不適當の點少からざる事

七、現時學校にて敎授の實際を窺ふに常に男子を目的として女子は殆んど度外視せらるゝの傾ある事

八、今日の裁縫敎授は形式的にして實用に迂遠なる事

〇此に對する救濟策

(一)全くの不就學者を減らす事と(二)半途退學者を防止するとの二途にして、其の方法としては(甲)嚴命を發して就學の督促を勵行すると共に(乙)父兄を召集して女子敎育の必要を勸告することゝの二法は主として理事者の務むべき事なり(丙)女子敎育の方針を確立し、女子に適切の敎育を施すも、更に之を小別していふ時は(イ)出來得る限り男女學級を區別し(ロ)修身算術讀書作文習字等の諸學科は、男子より程度を低くし、且可成女子に適應せる材料を撰び

(ハ)女教員を聘用して専ら之に擔任せしむることの三項と(丁)裁縫科教授の改良を計ること、即之を小別していふときは(イ)他の諸學科の教授時間を節して裁縫科教授の時間を增すこと(ロ)裁縫用の材料として新奇のものを競はしめざること(ハ)虛飾的贅澤的及び玩弄的のものを嚴禁する事(ニ)裁縫科中にて洗濯、色上、浸拔、補等の諸法を授くる事(埼玉縣教育會雜誌)

●殊勝なる少年　参河國寳飯郡三谷町にて竹内太吉といふは、未だ十四歳の少年なるに、昨年赤痢病流行の際、母同病に罹りて、夫より長女たね十一歲、次男吉治八歲、次女ひさ六歲、三女きし三歲の四名に傳染して一家五人の患者となりしに、父長吉は常に酒屋の稼ぎに行くにて、內に居す。內に居て無事なるものは太吉のみ、たゞ一人にして萬事をとりまかなひ、鷄を飼ひて卵を得ては半ばを患者に與へ半ばを賣却して藥價に當て、看護怠りなかりしに、母、及ひたね、ひさの三名は遂に死亡しその後は專ら弟吉治妹きしの世話をなして、まめ〳〵しき事縣廳にきこえ時任知事より、左の如く褒賞を賜ひたるこそめでたけれ。

褒狀

愛知縣三河國寳飯郡三谷町
竹内太吉
明治十六年生

資性温厚平素能く孝悌の道を盡す就中明治廿九年九月父母弟妹の擧て病に罹るや之れが看護を一身に荷ひ日夜怠りなかりしも遂に母及二妹は死歿し父は生活上他へ出稼ぎするの止むを得ざるに至る爾來刻苦家計を經營し病患又は幼稚の弟妹を能く愛撫候段幼年にして此志行ある洵に奇特に付其賞として金三圓を下賜候事

明治三十年四月廿日

愛知縣知事時任爲基

●瓜生岩女逝く　史談に、雜報に、屢々世に紹介したる篤志の老媼瓜生岩女は、數十年來專ら身を慈善事業に委ね、老いて益々貧民救濟、其他に頗る盡瘁し、頃日瓜生會の用務にて、福島縣にいたりゐしに、遂に病に罹りて、手厚き治療もその効なく、去る月十九日、瓜生會の事務處に於て、かへらぬ客となりをへぬ。あななげかはしきかも。

●子供の無邪氣　政治家にその人ありと聞えたる犬養毅氏も、一家の活計には心を留めず、從て負債も山の如くなりて、屢々執達吏の來向を煩しけるが、度重りては又何とも思はざる樣になりぬ。さて、ろの愛兒に今年八歲になれるいたづらざかりのものありけるが、執達吏も亦近傍に住みて、仝じ年頃の子をもてり。されどこの二人の子供は仝じ學校にも通ひて、常に中睦しく、毎日おもしろく遊び歩きけるに、忽ちにして怒り忽ちにして笑ふは小兒の常とて或日二人は笑ひどよみて遊び居けるに俄に喧嘩をはじめ互に罵り合ひしが、やがて執達吏の子は大聲に「貴樣の家は貧乏で金も何もない己の父爺さんが度々往つて能く知つて居るぞ」といひければ犬養氏の子ぬからぬ顏に「何た手前の所の親父は横文字が讀めないだらう」とやり返したり。犬養氏家の内に在りて之を聞き、苦笑して妻に語りたりとなん。如何に子供の頑是なきよ。

●鼠の長旅　こは別にめづらしきに非ず、たゞをかしきなり。米國のある新聞に載せたる話にして、某なるもの一の自轉車をもてるが、或夜此を天井に吊しおきたるに、その傍に食物の棚ある爲め、鼠は之に飛び移らんとて、まつ自轉車に跳りつきしが、車は廻り〳〵て、己の身は如何ほどはせ躍りても上

部に達することを得ず、遂に朝までおせりたるものと見え、夜明けて人影を認め、鼠は尤も疲れたる樣にてにげうせたりといふ。後に車のメートルにより廻轉度數を計算しみたるに、此の鼠は、常に二十哩(九里二十町余)を歩行したるものなりといふ。

●慣用の外國語　吾も人も、平常用ゐ來れる言葉にて、元よりの我か國の語にあらざるもの數多あり。これらは、多く、外國の物の入り來りたるを、そのまゝの原名をよび慣して、漸く國語と混雜し、訛りたるもありて、古きは遂にその別ちを容易く知り難き樣にまでなりしもあり。此等の別を知りれかんは、最必要なることなり。曾て第百三四號の女鑑にも戯せたることあれど、再び補ひて、こゝにかゝぐ。

アッシ、厚子、蝦夷語(アッニの皮より織ろエゾウ人の常服なり)

アヘン、鴉片又阿片、Oqinm の音譯字を音讀せるなり

アマ、亞麻、羅甸語 Amarisの音譯字

アンペラ、東印度邊の語(船來する一種の席)

アルコール、酒精、亞剌比亞語 Alcohol

アルヘイトー、有平糖、佛語アルヘイトム(砂糖)より起るさいふ(菓子の名)

エニシダ、樹ノ名、蘭語エニシダの轉

カステイラ、卵糖、西班牙ノ地 Castillaに起る(菓子の名)

カッパ、合羽、西班牙語 Capa

カナキン、金巾、葡萄牙語 Canequin なり

カボチヤ、南瓜、東埔寨(カンボデイア)より來りし故なり

カンテラ、手ランプノ名、蘭語 Candelaar (燭臺の訛)

カメ、西洋渡來ノ犬、英語(Come(來レ)の誤解

ガラス、硝子、英語 Glass(グラス)

カナリヤ、福島鳥、太平洋中 Canaria(カナリヤ)島の名に起る

カミルレ、蘭語Camille(菊類の草の名)

カルメル、浮石糖、(英語Caramel(カラメル)の轉)

カルタ、骨牌、西班牙語 Carta
キセル、烟管、西班牙語 管ノ義
ギヤマン、硝子、金剛石を「デアマン」とも稱する誤
キリシタン、切支丹、西班牙語 Christian(クリスチヤン)の訛
クロンボ、黒坊、錫蘭(セイロン)島の地名(Colombo)に起る
クワントンじま、廣東稿、(支那廣東(クワントン)より出づる絹織物)
ケンチヤン、卷繊、字の唐音(豆腐、蓮根、牛蒡などを油に煠めて汁となしたるもの)
コツプ、闌語 Kop
コンピラ、金毘羅、梵語
ゴロフクレン、呉羅服連、又呉羅、(闌語のGrof(粗)Grein(駝毛布)の訛)
コウヒイ、咖啡、闌語 Coffi
コンペイトウ、金米糖、西班牙語Confeito(果實の砂糖漬の義なり)
コムパス、定規、闌語 Compas
コレラ、虎列剌、英語 Cholera
コルク、瓶ノツメ、英語 Cork

サラサ、更紗、南印度の「サアラダ」産を良とするより起る
ザボン、蕃語、(暖地の果實)
ザン文、懺悔、梵語
シツポク、卓袱、字の唐音といふ、(今、蕎麥切に、松茸、椎茸、蒲鉾、菜などを加へて煮たるものゝ稱)
シユビン、溲瓶、字の唐音(尿器)
シユチン、織物ノ名、葡、佛、闌、及唐音
ジヤガタラ薯、薯ノ名、爪哇島の「ブアタピア」の俗名「ジヤガタラ」より起るといふ。
シヤツ、襦袢、英語 Shirts
シヤボン、石鹸、西班牙語 Xabon ノ音譯 佛語 Savon
シヤンパン、三鞭酒、佛國「シヤンパン」より製する酒
シヤツプ、帽子、佛語 Chapeau
ステーシヨン、停車場、英語 Station
ズボウトウ、闌語 Drop zoet hout(和闌より舶來せし痰の藥)
スヰトン、水團、字の唐音(うどん粉を捏ねて丸め汁にて煮たるもの)
ソウダ、曹達、Soda 英語

ソロバン、算盤、字の唐音
ソップ、肉汁、英語 Soup
ダース、數十二個 一組ノ名 英語 Dozen(ダアーズン) の訛
ダンナ、檀那、又旦那、(梵語陀那鉢底(ダナハテ)の略轉
ダイヤモンド、金剛石、英語 Diamond
タバコ、烟草、蘭語 北亞「メキシコ」國の一州「タバコ」にて歐人初めて得たるよりいふ
チヤウじま、茶字縞、(印度の刹几兒(チヤアル)國の名に起る)
チヤン、瀝清、Chianturpentine の略
チヨク、酒盞、鍾の字の朝鮮音
テエブル、卓、英語 Table
テエル、兩、支那の金(我壹圓五十六錢二厘)
テンプラ、天麩羅、西班牙 Tem Ple (寺) の料理より來ると
テント、天戸、英語 Tent (露宿の天幕)
テンビン、天秤、又天平、天平の唐音(秤の音は、しやうにして稱と仝し)
ドンス、緞子、字の唐音、或は純子など記す

ドウサ、礬水、明礬の蘭語「ドウス」ノ轉
トン、噸、Ton 英國の重量(我二百七十貫餘)
ドンタク、日曜又は休日、蘭語 Zun dag の訛
トンネル、隧道、英語 Tunnel
パッチ、股引、朝鮮語、又洋語「パンツ」の轉なりと
パン、麪包、葡萄牙語 Pan
ハンケチ、手拭、英語 Handkerchief
バカ、馬鹿、梵語幕何、(痴)又は摩訶羅(無智)の轉にて僧の隱語に起れる語といふ。(常に馬鹿の字に當て、秦の趙高の故事とするは妄ならんといふ)
ビイドロ、玻璃、葡萄牙語 Vitaeo
ビール、麥酒、英語 Beer(ビーア)
ビスケット、乾パン、英語 Biscuit
ピストル、短銃、Pistol 以太利 Pistola 府の創製
ピン、針、英語 Pin
ビロウド、天鵞絨、西班牙語 Vellude

フトン、蒲團、字の唐音

ブランケット、氈、英語 Blanket（普通ケットといふ。）

フランネル、小絨、英語 Flannel

ブラッシ、刷子、英語 Brush

ブリッキ、葉鐵、蘭語 Blik

フウト、英尺、Foot（我一尺〇〇五厘二八）

ペケ、惡しき語に用ゆ。（馬來語 Pergi の轉、又蘭人、馬鹿な Baka さ書したるを英人ペケさ讀めるに起るさいふ）

ヘチマ、絲瓜、蠻語ならんといふ。

ペン、洋筆、英語 Pen

ベンガラ、朱の名、印度の「ベンガラ」より起る

ペンキ、番瀝青、蘭語 Pik の訛

ボタン、紐釦、葡萄牙語 Boton

ポンド、磅 Pound 英米の重量（我百二十匁）

ポンチ、オドケ書、英語 Punch

ポンプ、喞筒、英語 Pomp

マイル、哩、Mile 英の里程（我十四町四十三間一尺餘）

マンテル、上衣、蘭語 Mantel

マッチ、摺附木、英語 Match

ミシン、縫機、英語 Sewingmachine の略訛

ミソ、味噌、朝鮮語に醤を密祖といふ、

ミイラ、木乃伊、（英語 Mummy を支那にて木乃伊（キノイ）と訛譯せるを更に訛れる語）みいらは埃及の古俗屍を薬用さしたるものさいふ

メエトル、米突、佛國の尺 Metre（我三尺二寸九分余）

メリヤス、莫大小、西班牙語、又葡萄牙語なりともいふ。詳ならず。

モンパ、紋羽、番語

ヤアド、尺の名、英國の尺 Yard（我三尺〇一分）

ラシヤ、羅紗、蘭語 Laken rassen

ラッパ、喇叭、梵語ならん

ラッコ、獵虎、蝦夷語の音譯なるべく思はる

ランプ、洋燈、英語 Lamp

リンネル、織物、英語 Linen の訛

リンズ、綾子、字の唐音當字に綸子ともかく、

ルリ、瑠璃、梵語（透徹するもの、稱と云）

ロウハ、綠礬、字の唐音（ロッパンの轉）

◎女子教育談　青木嵩山堂發賣

こは、去し日、帝國ホテルにて開きし、女子大學創立會に於て、近衛公爵、蜂須賀侯爵、大隈伯爵、成瀬仁蔵氏以下數名の演説したるを筆記して一小冊子とせるなり。各士の説、悉くよしといひがたけれど、參考までに一覽しおくは、あながち無益のことにあらざるべし。されど定價拾五錢はちと高し。

女鑑歌文兼題

五月　廿日歌……夕水鷄　文……蛙を聞く

六月　五日歌……曉郭公　文……雨中待友
　　　廿日歌……夏懷舊　文……朝顔

七月　五日歌……山内一豐妻　文……作文の添削を乞ふ
　　　廿日歌……遠村白雨　文……池蓮

八月　五日歌……綠陰散歩　文……海邊に遊ぶ
　　　廿日歌……電信　文……團扇

◎原稿寄贈者に告ぐ

兼題歌文、其他すべて原稿に關するものは、國光社編輯部宛に送りこさるゝ樣兼て告げ參らせしに、往々國光社御中など記して送らるゝに依り、混雜の折などは、編輯人の手に入るまでに二三日も後るゝことありて、折角〆切までに送られたるも、間に合はず、あたら沒書に屬するもあり。かくては寄贈せられたる方にてもいかばかり口惜しからんと推し量らる。此の後は、必、原稿に關するものは編輯部宛に、發送に關することは發送部宛に、代價其他金錢に關することは總て會計部宛に送りこさるべし。

教の庭



五月五日兼題　新竹

天

さや〳〵と涼しき風になひくまて
いつのひにけむろのゝわか竹　伊豫國松山市本町四丁目　重松たか子

地

吹く風になひくみとりのわか竹は
すゝしき物のはしめなりけり　伊豫國松山市鐵砲町十八番戶　野中わさ子

人

吹く風になひきなからもわか竹の
みとりに千代の影は見えけり　台灣台北病院　杉浦芳子

秀逸（十五首）

おひさきのまたうらわかき若竹も
さすかに千代の影はみえけり　住山幾子

今よりも千代の根さしは知られけり
ふしさへ長くおふるわかたけ　山本つね子

すく〳〵と生ひたつ庭のわか竹は
よのうき節にならはすもかな　仁井田富子

心をはおのかすかたにならへよと
いさめかほなる窓のわかたけ　黒瀬春惠子

新らしくおひたちそめしなよ竹に
うれしきふしもみえにける哉　土肥仙子

すく〳〵と憂節もなく生ひたちて
千代の色あるにはのわかたけ　西川順子

行く末の千尋のかけをふしことに
しめてそ生ふるそのゝわか竹　春永己巳子

ことしおひの竹の若葉もおのつから
八千代經ぬへき色は見えけり　山田璋子

生ひいてしにはの若竹おのつから　小町谷園子

やちよへぬべき色はみえけり

わか竹のはすゑの露のたまちれは　小町谷里江子
ちよのしつくの心地こそすれ

我やどの庭のわかたけしけりあひて　後藤のぶ子
月もらぬまてなりにけるかな

今年生のまどのわかたけ千代をへて　三谷きみ子
かはらぬ色ぞまつ見えにける

朝夕になはきこゝろのともとみん　兼子織部子
茂りにしけれまどのわかたけ

あめかせになひけど折れぬ若竹は　田代　艶子
親にれとらぬふしぞ見へける

うきふしもしらでのひゆく若竹は　名取正代子
自つからにや千代もへぬらし

（以下原稿到着順）

若竹のこゝろむなしくれひたちて　山口やす子
うきふしゝけき世に榮ゆらん

去年植ゑし庭のわかたけ立のひて　山本のぶ子
窓暗きまてしけりあひにけり

さしかはす枝もとをゝに葉を繁み　木川　里子
月さへもらぬにはのわかたけ

枝の上にふるともみえぬ夜の雨の　仁保　基子
露をつらぬくのきのわかたけ

ふみをよむ窓のくれ竹日にそへて　藤原　笙子
若葉すゞしくなりにけるかな

植ゑにしは去年と思へどちよ込て　牧山きよ子
繁りあひにけり庭のわかたけ

あさ夕に友となさなんわかにはの　伊藤　清子
千代のこもれることしふの竹

茂りあふ庭のわかたけうちなびき　春野　梅子
窓をゝくらくなしにけるかな

今年生の窓のわかたけしけりあひて　中山かず子
千代をことほく色も見えけり

ことし生ひし竹のわか葉の深みどり　中山　富子
ちよ榮えゆくいろぞみえける

數へねど直くなるものに生ひたちて　富士村幾子
ひとよ／＼にしけるわか竹

年毎にふしもみことにかすそひぬ　冬木　赤子
いもかてうゑのにはのわか竹

隣より根さしたりけんれひ出てゝ　森山　英子
うきふし知らぬ庭のわかたけ

すく／＼と垣根をこゑて若たけの　思はぬかたにれひしけりけり　森山以都子

いつしかとその丶若竹生ひたちて　葉影ひろくも繁りあひにけり　美奈井興志子

風吹けは露をはたまとちらしつ丶　なひくもすゝし庭のわかたけ　長山　孝子

千代かけて枝葉茂らんふしとほく　のひてすくなるまとの若たけ　羽田三緒子

きのふよりけふとのひゆく若竹を　まなひのまとにみるそ楽しき　河田いし子

茂りあふことしの竹のみとりにも　すてに八千代の色はみゑけり　眞島千鶴子

若たけのわか葉しけりて文まなふ　まともをくらくなりにける哉　前澤　繁子

ふきいるゝ風は見ゑねとわか竹の　なひくまとこそ涼しかりけれ　前澤　幸子

今年生のにはの若たけやさしくも　千年かはらぬいろ見ゑける　榊原八千代子

ことし生の竹にむれゐて友すゝめ　しはなく夏になりにけるかな　横田　秋子

今年ふの庭のわかたけあを／＼と　千年へぬべきいろもみゑけり　西　艶子

小雀もよろこふこゑのあさかせに　清きそよきのにはのわかたけ　星野　弌子

世をいとふ人ならなくも住わびし　庭にうれしきわかたけの園　星野　仁子

むつまじき隣のかきを生こして　したしくのひしにはのわか竹　星野康世子

としことに園のくれ竹れひそひて　みとりの若葉いろもかはらず　佐治ふさ子

今年おひの松よりはや生ひたちて　ちよをしめたる庭のわかたけ　上原のぶ子

ことしれひの竹のひとよにゆく末の　ちよのみとりのこもる庭かな　下元もと子

わか竹のまき葉にかせの音づれて　千代のしらべは初まりにけり　綿野りき子

うるはしき色ぞ見ゑけるわか竹は　ひとふし毎に千代こもるらん　仁保志摩子

萬代もかはらぬふしのいろ見ゑて　みさをたゞしくれひし若たけ　喜道規久子

ろよとふく風にもうごく若たけに
たかき操のふしぞあやしき　服部かつみ子

あすよりは學のにはにれひたちて
めでたきふしを見せよわか竹　打田いろ子

ちよふべき色をもこめし今年生の
竹こそことにめでたかりけれ　佐々木つね子

此頃はひとよ／＼にたちのひて
なびくもきよし窓のなよたけ　下田ひろ子

朝な／＼ぬれていろそふわかたけは
みどりの露やそむるなるらん　三島みさ子

すなほなる心をまなぶともとせん
まがるふしなき園のわかたけ　川崎晴子

咲く花のうつろふことに習はすて
ちよさかゑなんにはのわか竹　川崎さく子

夏のよのいとゞ短かきふしのまも
千代とのひ行く庭のわかたけ　多賀能初子

なよ／＼と風になやめるわか竹も
雪しもしのぐふしはみゑけり　齋藤品子

すなほなる心の友となりにけり
ふみよむまどの今年生のたけ　澤田結子

すく／＼と節もたゆまず生ひ立ちて
千代まてなひく庭のわかたけ　本間信子

いさましくれひ出てにけるわか竹は
千代の色なるわかはさすらむ　長谷川まき子

幾千代もかはらぬ色はわかたけの
わかはの中にこもりけるかな　大庭靖子

新らしき竹のふしにもきみが代の
千とせをこむる色は見ゑけり　田代綾子

まどちかくれふる若竹いつしかも
千尋のかけとなりにけるかな　林常子

昨日までたけのことのみ思ひしを
はやわかたけに朝かせのふく　壺井みき子

よ心をいつしりそめて今年生ひの
庭のなよたけつゆけかるらん　永井さい子

進みゆくみよの榮ゑもふしみゑて
ますぐにそだつそののわか竹　北村てい子

わがやどの庭にれひたつわか竹は
浮ふししらでちよをへぬらん　北村孝子

今年れひのひとよふたよのわか竹は
幾よのふしをかさねゆくらん　北村左枝子

露をおび風になびけどわかたけは　小森　定子
雪にもをれぬみさをみえけり

すく／＼とのび立つ庭のわか竹を　坂田きみ子
學びの兒等に見まほしきかな

わか竹の色あらためぬこころもて　岸田はつ子
よながく君に事へまつらん

生ひのぶる園の若たけ今朝見れば　石川すけ子
おもはぬかたに枝たわみけり

千代かけて根さしも深きわか竹は　大谷津こと子
みどりの色のいさぎよきかな

すゞめ子がやどりさだむる若竹の　大谷津わや子
しげみに千代の色ぞこもれる

となりなる庭に生ひ出しわか竹は　石川とく子
垣根こしにも見えにけるかな

竹の子の一よ／＼に生ひ立ちて　植木とよ子
いつしか垣を越えにけるかな

今年おひのまどの若たけのび立ちて　植木はな子
すゞめも宿を取りにけるかな

年毎にあたらしき子の生ひまして　中桐　杏子
千代の根ふかき庭のくれたけ

すなほにも庭のわか竹のび立ちて　戸塚　鐵子
八千代へぬべき色は見えけり

若たけの生ひしげりたる下かげは　荻原　章子
なつもすゞしき心ちこそすれ

（以下延着）

生ひしげる教のにはのわかたけは　西元とも子
學びのみちのつゑとなるらむ

若葉さす軒のわかたけ日につぎに　山下ふゆ子
みさをの色はかはらざりけり

ふしごとに千代もこもりて若竹の　廣田とめ子
軒よりたかくなりにけるかな

月影もゝらぬばかりになりにけり　海島のぶ子
庭のわかたけしげりあひつゝ

文まなぶ窓にかげそふわかたけの　小西　琴子
ちよのみどりをともとみる哉

親よりも勝りて生ふるわかたけを　小西　清子
かゞみとなしていざや學ばん

ふし／＼に千代の緑やこもるらん　日高かず子
生ひ繁りゆくにはのわかたけ

露しげき世のうきふしを重ぬとも　一番ヶ瀬つぎ子
すなほにのびよ庭のわかたけ

ことしふの庭のわか竹そよ／＼と　竹内　頼子
かせのわたるも心ちよきかな

すく／＼と繁り生ひ立つわか竹に　高田　清子
千尋のかげの見えもするかな

世の人もかくわらまほし素直にも　尾立とみ子
たひいてにける庭のわかたけ

文まなぶまどに千歳のかげみせて　中川みさを子
みどりも深く生ふるわかたけ

今年生ひの園のわかたけ露もちて　川中たづ子
風のまに／＼うちなびきけり

日にそひて緑子わまたすくよかに　磯野たま子
たひいてにけり庭のわかたけ

をり／＼は露もこぼれてふく風に　磯部つや子
なびくもすゞしまどのわか竹

五月五日兼題　新茶をおくられし返し

天　栃木縣日光町　黒瀬森恵子

昨日は君がこゝろをつくして製せさせ給ひたる新茶、わざ／＼めぐみたまはり、今にはじめぬ御ねもころさ、いと／＼うれしうてなん。老母事は、かねて知らせ給へるやうに、日頃こよなう茶をめで侍るれど、其よろこびいはんかたなし。今よりは、日々心ゆくかぎり煎じたてんとたのしみ居り候、なほ新茶のことゝて客人のもてなしにも、一きははえあるやう覺え侍り實はみづからまゐいでて、此よろこび聞え上げまほしう侍れど、用事もたしかたくてなめげながらふみもてかくなん。かしこ。

地　赤坂一ツ木町八十一番地　河田いし子

としことにかはらなう。御手せいの新茶。ことしも深山めくみたまひ。あつき御心のうれしき。いはんかたなくなん。ひろき御園に年中御こゝろをこめられ。御手入もとゞかせたまへど、いつもながらみことの出來、かをりも殊さらなれど、日長の折から、日毎にたのしみいたゝき申さんと、打寄り嬉しくよろこび候ふ。老たるものは心みじかくも、はやきふすなどとりいでながら、厚う御返し申せよとのことあれど。つたなきふでのはこびかぬれど、遠からんうちまうのぼり、よろづ御禮きこえあくべく、けふ

は御返しまてにかくなん。

人

但馬國城崎郡豊岡本町　西川順子

御桑園のほとりに植ゑさせられし茶の新芽、御手づからつませられ、こがひのわざに御いとまもあらせられず侍らむを、例の年にかはらせられず、調せさせられしとて、賞翫すべきむね仰せ給はりし事のうれしさよ、實に〳〵色さへ香さへいと濃き君が御情けのほど、祖母をはじめ兩親ともども汲みかはして、よろこびあへるになむ。この羊かんはいさゝかながら、妾が手すさびにものせしものに侍れどなめげをもかへり見ず、御笑ひ草におくり參らす、御茶うけの料ともなりなむには、こよなう嬉しうこそ。猶々ふなれのものとて、御役には立つまじけれど、ふさはしき御用も侍らむ、御心おきなう仰をさせ玉へや。

（以下原稿着到順）

山口やす子

山里は、事業を勉むるうちにも、花を見、鶯を聞くよすがもあれど、いかに春氣色も、長閑にぞあるらん、まして茶摘は、女少子老嫗うちむれて、いと面白き事とのみ傳へ聞きつれど、いつか心晴らしに參りたく、年頃思ひ立ち侍りしも、家内の事繁きにほだされて、今年もはいなくやみにけるこそ恨なれ。さるに珍しき御製の新茶澤山下され、厚き御志のほどを戴き、さそく釜に湯をわかし、煎して試みしに、風味といひ、香りといひ、獨り味ふも興なき樣なれど、此道に心得ある友どちにも割愛すへくぞんじ侍るになん。眞に斯ばかりのめでたき新茶はなか〳〵得難かるへく、是れ偏に多年御心を入れられし結果と想ひ、一入ありがたくこそ。かしこ。

福原菫子

げに、春も、いつしかくれて、卯の花垣の遲櫻、ひとり垣根に、咲きのこり。足引の、山ほとゝぎす、なきそむる、夏の日とはなりにき。いとしや、君には、けふ、なつかしき御玉章、そが上に、色香も、しるき、宇治の新茶さへ、給はり、うれしくもうれしくろ侍る、こは、日頃より、父のわきて、嗜ませ給ひつる事とて、よろこばせ給ふことも、中々に限りなくて、より〳〵打つどひて、たのしく味ひ、語合ひ、侍らんは、永き日の徒然も、ものかはと、うれ

しく侍り、先づ拙き筆にて、御返しにとまて、かく
なん。かしこ。

三谷起美子

御手づから摘みとらせ製し給へりとて、いとうるは
しき新茶を、白がねの壺にみたせてたくらせ給へる
は、いと〳〵嬉しう、折しも西の京よりまらうどな
ど來合ひ侍りし頃なれど、直ちに煮出し侍りしに、
かぐはしさいはん方なく、まらうども、名に負ふ宇治
のなもまさりてなど、めではやし給へれど、人々淺
からぬ御志のほどを、深くも喜び侍りぬるにより、
取りあへずかくなむ。あなかしこ。

岸田はつ子

花ちりはてゝよりは、いと物さびしう、春の行く方
のみこひしう思ひ玉へ侍るに、所せき都の住居は、
二階のながめとても、たゞ人の家居のみにて、見わ
たしもなく、いと〳〵さう〳〵しう侍る折しも、宇
治見なるを給はせたるかたじけなさに、やがて火桶
に炭さしそへ、もてはやし侍りぬ、此の品、折から
もらひ合せ侍れど、いさゝかなら御紙にとて。かし
こ。

廣田とめ子

つく〳〵と降り暮す空の眺めがちなる、折しも、贈ら
れし若葉の木芽、宇治山のものにもまされる匂の、
いかで、おさ〳〵は思ふべき、やがて、喫ろひ盡すも、
新しき心地せらるれど、秘めおきて、月の夜雪の朝
の松風に、香はしき君が心の、通ふを聞くも、また
うれしかるらん。あなかしこ。

木川里子

のたまはせ給へる如く、淺ましうもをやみなき霖雨
に、いふせき宿は、心のうちの八重葎さへ、日毎に
しげさまさりゆき、書よむ力もなく、空を眺めては、
いつまての雨ぞなど、打わぶる折から、徒然なくさ
むる料にとて、新木の芽あまたたくり玉はり、いと
〳〵めづらかになん。ことに宇治山よりもとめ給ひ
しなれは、ひとしほめでたく、人々打よりもてはや
し、直に湯たてゝこゝろみ侍りぬ。かう梅雨のふりは
へてめぐみおこせ賜へる御志は、木の芽のかをりに
まさりて深しと、いと嬉しうこそ、それもひたまふれ。
とまれかくまれ雨間待ちえて、御館おとろかし、御ま
のあたりに、よろこひことは聞えつべくなん。あな
かしこ。

社告

拜啓益御清健奉賀候引續き御引立を蒙り辱く深謝仕候陳は今回會計主任者左記の者に變換致候間爾後は乍御手數金錢御受拂の事は勿論會計上の御用は必下名の者へ御宛被下度此段得御意候草々敬具

國光社會計主任
澤邊祐順

明治三十年三月

國光社

女鑑第百三十一號目錄

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は郵便爲替小爲替銀行爲替及郵運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二册(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十年五月九日印刷
同　年五月十日發行

發行兼印刷人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
編輯人　同　山根勇藏
發行所　同　(電話番號本局八八)　國光社

(印刷所)　東京國光社印刷部